

538

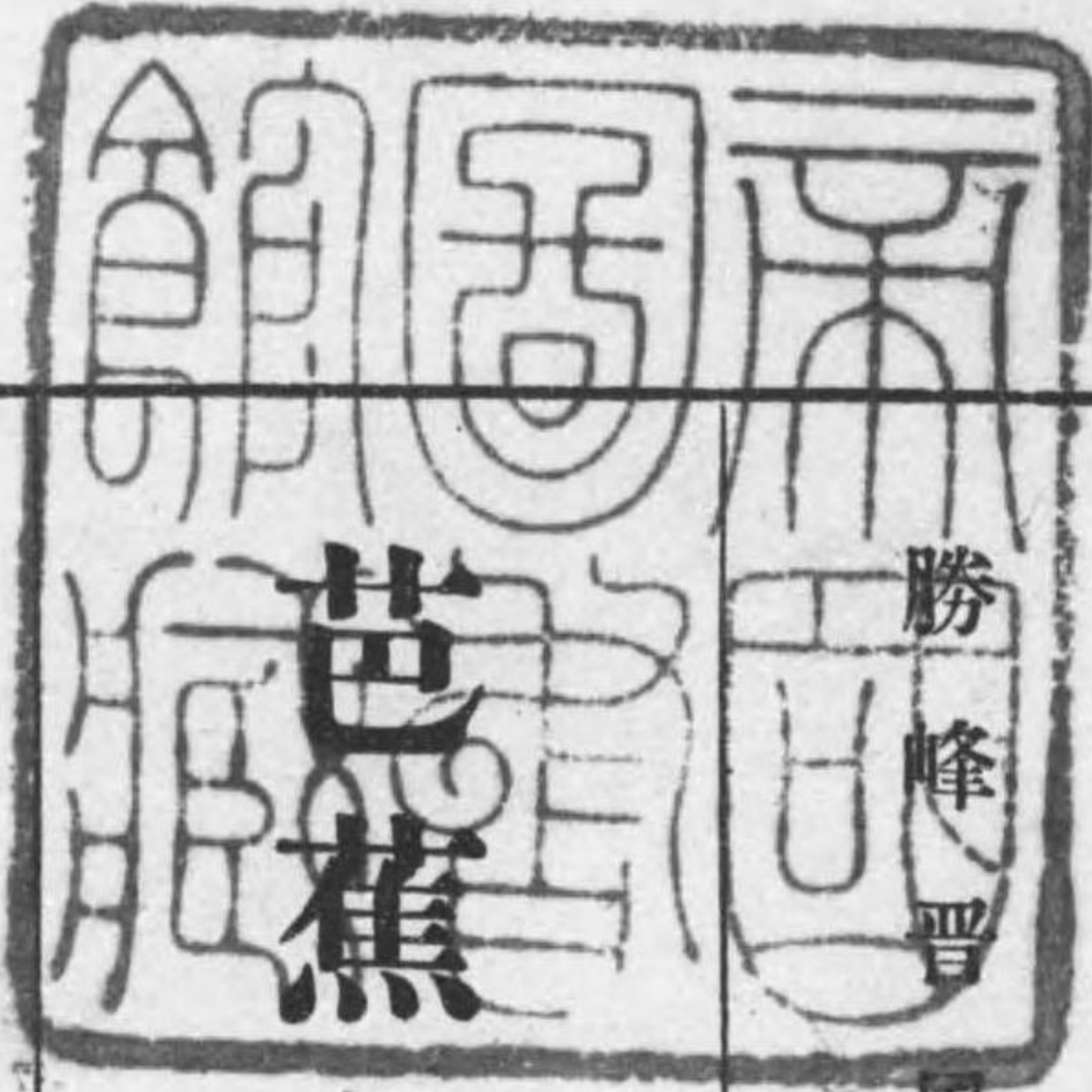
98

6 7 8 9 6^m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^m

始



31459



勝峰
晉
風
著

芭蕉
七部集定本

岩波書店刊行

大正
14. 3. 7
丙交



序

538-98
七部集の俳諧は、萬葉集以後の日本の詩歌の關所であります。此の關所を通る詩歌の旅人のために、冬の日の險しく、春の日のや、たひらな山坂から、曠野、ひさごの峠を越えて猿蓑の頂上にさしかり、關所の全景を俯瞰して、炭俵、續猿蓑の平坦な道をやすく下れる案内記となるやう編纂したのが、本書であります。

流布本にある雑草はむしり、小石はふるひ落しましたが、本文は古版本に對照して、漢字と假名を強てさし換へる事をせず、濁點一つの保存にも注意をはらひ、必要な部分は別に頭註を施すといふ風にすべて原本の體裁を傳へる事にしました。

索引も亦辭書であるといふ考から、本文に載する俳句、連句をそつくり取つて、全句索引を添へ、別に作者四百三十餘名の主要なる傳記を附録して置きました。

大正十四年二月

芭蕉七部集定本目次

七部集小見……………	勝峰	晋風……………	一	
冬の日集……………	荷	兮	撰……………	一
春の日集……………	荷	兮	撰……………	元
曠野集……………	荷	兮	撰……………	元
ひさご集……………	珍	磧	撰……………	一六
猿蓑集……………	去來、凡兆	撰……………	一七	
炭俵集……………	野坡、孤屋、利牛	撰……………	一四	

(次目集部七)

續猿叢集……………沾圃稿…三三

七部集作者列傳……………勝峰晋風…一

七部集俳句索引……………一

七部集連句索引……………一

七部集小見

冬の日は茶人の俳諧である。

茶人の持味もちあじがある。それは光線の弱い、暗い、狭い、茶室の風炉手前に、檐のしぐれを佗ぶる陰性な心の動きでない。

茶の湯者をしむ野邊の蒲公英

野の春を黄に染める小さい花を愛で、たま／＼提けて行つた野風炉を沸かせる潤達な茶人味である。かれらは富に厭きる大分限者ではないが、この上の生活苦を求むる焦心を要しない、ゆこりを持つてゐる。

らうたけに物よむ娘かしづきて

あはれ、好き聲取らせて、若き二人にその代ミ家ミをゆづるのが日ごろの望みである。机に向ふ面映ゆけな娘の姿は、かれらのたまらない愛なのである。

ゆふべの膳に鯛はなくとも、『冬待つ納豆た、なるべし』の惚びた食味を求め。絹すれの柔かものよりは紙衣の荒い手ざはりを好む。經書に通ずる望みはないが、書架から亂抽する雜書に好んで耽る。

冬の日には現はれた生活様式の簡素で、和漢の稗史、傳奇から引いた材料の多い理由の一つである。作者の側から見るならば、野水は名古屋の惣町代役となつた名望家である。その家は御大工頭中井大和の舊邸を小判百五十兩で買取つたので、表口三十五間の大構であつた。晩年宗和流の茶道にかくれて、尾州千家茶道之記に、『茶事も名高く、道具の目利等にも名ある者也』とあるから、正眞の茶人である。重五は上材木町の問屋筋で、その子簀笠に店をまかせて宮の驛へやがて閑居した。杜國は尾張藩の切米を扱つて、後日それが爲め罪科に處せられやうとした。越人は、『彼は富めり、我は貧なり』とさへ稱してゐる。

かれらが芭蕉に接する前に、既に俳諧のたしなみあつた事を閑却してならぬ。杜國が貞門の俳諧師椋梨一雪から奇才を試みられた一作、

ちりけもこにてうぐひすの啼く

の難句に對して

紋きころ其の梅鉢や匂ふらむ

こ、ちりけ（身柱）を衣服の紋の梅で受け、その枝に鶯を啼かせた逸話の如き、これも作者の一人羽笠が伊丹派の鷺助に逢つて、附合で互ひに揶揄した如き、孰れも貞享以前である。野水、重五、荷兮に

(見小集部七)

就いては確證ないが、此の道の素人でなかつたこと疑ひない。

そこへ、芭蕉は狂歌の才士を慕ふ風狂人の態で、貞享元年十月、破れ笠に山茶花をこぼしらせつゝ、此の國へ漂ひ來たのである。鳴海の千代倉知足から宮の驛の林桐葉へ、桐葉から杜國、荷兮へ紹介したのであらう。

かれらは貞門、檀林の徒の勢力争ひから、大閥小閥を構へて、今日の寫生閥のごとき角突きを不快に傍觀して居たので、芭蕉の門戸を張らない洒脱な態度で、寂の世界に徹しようとする眞贋な句作で、二つながら敬服して、そこ、この吟席に招き、その新らしい俳諧の捌きを受けた。

才人荷兮はその間を斡旋して、遂に冬の日五卷が撰集されたのである。

芭蕉の渾一した心境で氣分本位の新しい捌きをなさうとしたこと、連衆に附合の素地がなく、稗史、傳奇の材料をこなす力がなく、殊に一卷を通じて新氣分を表現する茶人式な持味がなかつたなら、折角の意圖はむざ／＼畫餅になつたであらう。

(見小集部七)

春の日は郷士の俳諧である。

郷士は武士階級から歸農して、士分の籍にある者を稱する。

かれらは種々の事情あつて半農生活に投じたが、苗字を帯刀の二特権を許されて、家格を落さず、舊縁ある地方人に信望されて居たのである。

四

穂 夢 生 ぶ 藏 を 住 ひ に 侘 な し て

廂は雨に朽ち、壁はころろ落ちて、萱葺の藏の影を投けた溝川には、がさ／＼な夢の白い花が咲いてゐる。侘なしての語氣に取繕はぬその住ひを想はせて、静閑な、や、落日の郷士の生活を描いたのである。

我 が 名 を 橋 の 名 に 呼 ば る 月

藏住ひにいぶせく、『侘なして』ゐるが、一郷の仕事になれば仁俠な郷士の述懐である。私財を投じて往還に架けた橋の、誰いふもなく我が名に呼ばるゝを聞知つて、その橋に照る宵々の月を眺めて快心の體である。

此の二句の情景は決してたゞの町人、百姓の姿でない。没落した豪家の倅でない。私解のやうに風雅に侘ぶる有爲の郷士を見る時、或は作者その人の感慨でないかこすら疑はれて、現實感を深めて行くのである。

春の日の撰者は、冬の日と同じく荷兮である。彼は蓬左の檀木堂と號した。蓬左は熱田の神宮に近き

(見小集部七)

寓居をさしたので、檀木堂の號に芭蕉の『かしの木の花に構はぬ姿かな』と詠じた自然の氣高さを、荷兮の人に屈せぬ強い性情を語つてゐる。彼が芭蕉を悪評して破門された説は、持前の傲岸から人の憎みを買つて言觸らされたのである。

作者には荷兮の弟冬文、舟泉、雨桐の如き新人がある。日藁は後に流浪したが、そのころは田家に籠を持つて、杜國に扶助された越人と共にころろくに新顔を覗かせてゐる。冬の日以來の野水、重五は郊外の別墅に市塵をさけて閑逸の風情が、老熟した其の附句から窺はれるのである。羽笠はすこやかだが、正平は影を没して、杜國も連句中に同坐して居ない。

春の日三卷の連句は、誰が捌いたか、問題になつて来る。

連句は捌く者の氣分で一坐の空氣が動く。材料の扱ひ方が變化する。冬の日を捌いた芭蕉はこの卷々の行はれた貞享三年の春、深川の舊庵に閉居したから、直接の捌きにあづかる筈がない。杜國か、杜國は空手形の咎めで三河に謫居してゐる。一人荷兮は三卷を通じてその作を列する。彼が前年芭蕉に接して深くその直指を體得したので連衆から推され、明快な才智で捌きを附けたのであらう。

荷兮が捌いたとすれば芭蕉の附句のない卷々のみでは、同門の思惑に對して撰集を憚る。その年の春、江戸蕉門の諸士が衆議判で行つた『蛙合』から

(見小集部七)

五

純蕉風の閑寂境を提示した第一作を挙げ、それに、かねて私抄して置いた同門の發句を添へて刊行したのである。

春の日の連句は、冬の日に幻惑されて傳奇的な構想と色彩が強い。自然の小景を骨董品として愛玩した茶人式な見方がある。

荷兮の捌いた特色はきこにあるだらうか。

舊文學の振向かうこしない農民生活の描寫である。肥桶をかつぐ農夫の純な生活味はないけれど、田園の四季のうつり、人の動き、朝暮の光景を率直に詠じた場面に乏しくないのである。

これは荷兮の個人色といふよりは寧ろ、冬の日傳奇的な霞を透いて匂ふ春の日特殊の地方色であるこ解する。

(見小集部七)

曠野は浪人の俳諧である。

主家の扶持をたゝれた浪人は、知る邊をたよつてその家に寄食するか。うす暗い路次の突きあたりの裏店で手内職をしながら、其の日くしのしがたい生活に落ちるかである。

今朝よりも油あけする玉だすき

妻に別れて日の浅い暮らしに、『後添よべこいふがわりなき』こいふ迷惑さうな前句を承けて、その佛事の膳立で臺所のごたくく情景である。油あけする若い女が後添の候補者である。玉だすきこいふ言葉が、さうした人柄の女を際立たせる。

あんぎん張りてかへる浪人

煤け行灯である。店先でも小座敷用でも構はない。その張替を頼まれた浪人が、すき腹に油あけの匂ひを沁み込ませつゝ、小刀を研ぐ。糊を煮る。新規に張上げて戻つて行くそれ丈けの事である。亡妻の佛事に關係を持たせなくとも好い。油あけする忙しさ、行灯を張る浪人、氣分の明暗を對照して現實な生活味を漂はせてゐる。曠野の配材の新色彩である。

(見小集部七)

偶然ながら作者はいつれも浪人である。今朝よりも嵐雪は、貞享中に越後の稻葉家に召仕へられて、一年ばかり袴の股立を取つて武士勤めをしたが、再び浪人して江戸の濱町に居た。或る女、梅太郎こいふ子を儲けたさうだから、あの附句のやうな情景の経験はあつたのである。行灯張りの越人は、名古屋に流寓して居たが、芭蕉の言葉に『二日勤めて二日あそび——酔和する時は平家をうたふ』こあるから、勤めこはいへ、日々の凌ぎがつけば好い氣ま、な勤めである。手内職に行灯を張る位はありさうな暮し

向である。

此の連句は嵐雪の浪宅でお互ひの生活記録を兩吟に吹き込んだので、越人の江戸みやげの一卷なのである。越人は曠野に兩吟四巻を寄稿してゐるが、作品の量から附句の技量から見て、撰者の荷兮を凌ぐ程の進境である。

曠野は元祿二年の編集である。朗詠集の部立にならひ、發句本位の新體裁を求めたので、作者の多くは勢ひ發句の部に集中されて、かれらの一本立となる道場かのやうに無名作者の雜揉を來たしてゐる。選句の標準を蕉門に置いて、古人の作も雖もその蕉風の句境に近いものは採録してゐる。

だから堂上風の連歌の制定者宗祇の作も、笑ひの俳諧の大成者宗鑑の發句も、眞實な趣向であれば嫌はないのである。古烏帽子の守武は散る花に佛の世界を戀ひ、さればこゝに檀林の宗因は謠が、りの渡り候かで、客觀描寫に傾いてゐるが如きである。かと思へば

あゝ たつたひ 立ち立たる 冬の宿

荷兮のごとき撰者その人が無條件で、こんな貞徳の『あゝ たつたひ 立ち立たる ことしかな』の古句取さへ敢てしてゐる。荷兮が貞門に寐がへる筈はない。貞門も俳諧の一國を見て、たまく縁語の世界へ誘惑されたのである。

(見小集部七)

曠野は浪人の俳諧であるといふ言葉は、發句本位の部立から見れば、其の語の内容を轉換させなければならぬ。

曠野は作者それごとくが俳諧の國々を流浪して、蕉風殊に發句の新道場を曠野に構へたのである。こゝにふ風に。

ひさごは士分の俳諧である。

同じ大小を差しながら拵への疎末な、同じ肩を怒らせながら附け元氣な、士分階級の生活がひさごの俳諧氣分を構成してゐる。

かれらは五人扶持そこらの俸米に不平もなく勤めてゐる。非番の日に窮屈袋をぬいで同役三石圍む位が、其の鬱散なのである。

碁いさかひ二人しらせる有明に

白を取らうが黒を持たうが、無關心で碁石を握るうちはいゝ。三番五番を越しになれば『この石は拙者の……』『いゝや、われらの……』『こゝ、二つの手がつれて行灯へ黒い影をかさねる。その争ひが夜を徹して冴えた心を尖らせる。』

(見小集部七)

有明の空に澄む拍子木のひびき、夜番の聲で宵から一枚引き残したまゝの雨戸へ氣がつく。そこからしらく流るゝありあけの微光に、はつミ朝勤のお互ひを思ひ合せて、執着の碁盤をはなれる。夜番の『ものもう』の一語に聯想を呼んで、その刹那の情調が動いてゐる。

ひさごの附句を味解すれば、さもない事件を詠じたやうで、此の氣分の潤ひを持つものが妙くないのである。

呼び歩行けごも猫は歸らず

子のない夫婦のいしがる猫である。いつもは飼主の聲を聞いて、こなりの屋根から、日南ほつこの庭から駆け戻るのだけれど、いくら呼んでも來ない。もしか盗まれはしまいか近所を呼び廻る。

ほこぎす御小人町の雨あがり

雨あがりの長屋の塀に附いて迷ひ猫をさがし行く。若葉の雫がほつり顔へ落ちる。その梢を仰ぐ視野を掠めて啼き過ぐる時鳥である。子飼の猫を案ずる人物も、呼びありく場所も、御小人町で明瞭に其の輪廓を定めてゐる。その人こそその場所、ひさごの俳諧の視ひ所である。附句の姿である。

ひさごは近江膳所の連衆が中心の連句五巻を収める。作者悉くが今いつた第三階級の武士でない。花

(見小集部七)

見の巻の作者曲水は金紋挾箱の知行取である。乙州は天津の本陣である。正秀は同門露川の評に『下位に居て上居に交り、貧家にして富家にくだらず』といひ、若黨一人持たぬ歳旦の吟に『刀さす供も連たし今朝の春』の作もあるから、漸く士分の格なのである。

撰者は同じ膳所の珍磧である。芭蕉は洒落堂の記に、彼の風雅な構へに眺望の美を稱したが、珍磧は芭蕉に接して氣分中心の新附句に啓發されて、野徑、探志、及肩の連衆を語らひ、日夜句作に精進して遂に近江膳門を起さうがため、元祿三年ひさごの撰集に志したのである。彼は連衆中でも、

こしらへし薬も賣れず年の暮

この平句が語るやうな百味筆筒に埃のかゝる佗しい醫者で、いさゝかながら扶持米も支給されてゐた。士分の俳諧たるひさごの撰者に適はしい境涯である。

(見小集部七)

猿蓑は隠士の俳諧である。

隠士は其の性に適するところを栖こしてゐる。山にあつても隠士である。麓にあつても隠士である。月洩る木蔭にさし掛けた九尺の小庵を狭しめない。淋しめない。淋しさを以て、まごこの故郷さへしてゐる。

淋しさを愛する俳諧の隠士は、風雅の究竟地を山の淋しさに求めて山居するが、その淋しさにみたるれぬ心を麓へ向けて再び山を下る。山の淋しさはたゞ松杉の嵐である。人間の淋しさは山よりむしろ麓を吹いてゐる。人々人の生活を描いて人間の淋しさはありやう譯はないのである。

幻住庵の山室をその麓の無名庵に移した隠士芭蕉は、人間の淋しさを愛して風雅のまことに徹したのである。猿蓑の俳諧をこゝに提唱したのである。

草庵にしばらく居ては打やぶり

西行の面影である。芭蕉の遺語にさうあるのだから疑ひを挾めない。が、既に面影である。うしろ向の人物である。歴史上の西行を對象としたのでない。彼の性行に近い隠逸者であれば能因で好い。芭蕉の感想で好いのである。句中の『しばらく居ては』を沈思すれば、しば／＼庵を構へて、しば／＼その庵をやぶつた芭蕉の淋しい瘦顔が、現前して來るでないか。

これぞ芭蕉の全輪廓である。西行や能因は縁暈に過ぎない。此の場合の面影は附句の一體で、いはゞ芭蕉の風雅の假象なのである。

いのちうれしき撰集のさた

芭蕉の前句を承け、しかこそその情を踏まへて、作者の別箇の感激を同じく面影に托してゐる。流石に

去來の附句である。さすらひの旅にある前句の遁世者が、舊廬に心をひかれつゝ、敕撰集の行はるゝ沙汰を聞き、詩歌に再生する歡びこいふ解釋は正面の觀察である。淋しき山庵を出た芭蕉を麓の寺に訪ひ、風雅のまことを躰得した去來が、猿蓑の撰集を師より許された其のうれしさである。撰集も嬉しきも現實の言葉である。去來の現實の感激なのである。

斯く解してこそ、面影附に托した前後の句意は相照映して、現實の氣分が主客渾一の境地になつて、その俳諧に象徴されるのである。

芭蕉の幻住庵入りは元祿三年四月である。その七月には山麓より遠からぬ木曾寺の無名庵に引越してゐる。『しばらく居ては』の眞情である。猿蓑の幻住庵の記は此の無名庵で起草されたので、友人中邑翠濤君の藏する去來宛の書翰に、芭蕉はその推敲の苦心を語つてゐる。第二段に

空山屏顔心相違いか、可_レ有_二御座_一候や。但し胸中の空山たがへて候間くるしかるまじくや。こ

のかみの御ぬしへ御尋可_レ被_レ下候。誹文御存知なきこ被_レ仰候へ共、實文にたがひ候半は無念に候間、こむづかしながら御加筆被_レ下候へこ御申可_レ被_レ下候。

さある。『このかみ』は去來の兄で漢學者の向井震軒である。その頃の去來は京都中長者町に家居して、東洞院なる同門凡兆を誘ひ、或は無名庵の扉をたゞき、或は芭蕉を京都に招き、懇切の指導を受けつゝ、

元祿四年の夏、漸く共撰の功を収めたのである。

猿蓑は隠士芭蕉の俳諧である。幻住庵の記さひ、凡右日記さひ、芭蕉の周囲に限られた私録である。一集悉く蕉門の作者である。その撰を許された去來及び凡兆は要するに市中の隠士である。

芭蕉は人間の淋しさを體驗せる俳諧の隠士である。猿蓑は彼の風雅の大本なのである。

炭俵は町人の俳諧である。

町人式なそらくしい感情の現金な表現がある。俗情に落ちる筈である。その附句には調子の低ひ規ひがある。前後の句に對しての懸引がある。附け悩む場所になれば軽く言ひ抜けて、その場を投げる遊句の如きである。さればさいつて炭俵を卑めてならない。炭俵の成立には別にその理由がある。

江戸の町人階級はあの時代の經濟生活の全幅なので、それから特別の俳諧思想の發生してい、背景を持つてゐる。炭俵を善意に解すれば時好に投じた流行體の新俳風である。無理解にこれを卑むのは蕉風の發達を知らない偏見である。

茶の買置を下けて賣り出す

この茶は思惑買ひでない。投資でない。季節に仕入れたのが賣れ残つたのである。賣れる見込みの茶が買置になつたので、値下げをした意味である。小資本の商人の苦しい商畧である。賣り出すさひ言葉が、逼迫したその手許を思はせる。

巧まない、あり來りの言ひ廻しであるが、内容はかなり複雑してゐる。

此の春はさうやら花の靜なる

春になつたら景氣は持ち直る豫想のその春は來たが、世間の人氣は沈んで淋しい。こゝろまちの花は咲いたが、さうやら世間はそなたにすら没交渉のしづかさである。

茶の値下げを實行した商人の顔は、よそ吹く風の不景氣に暗く壓迫されてゐる。前句のさこを規つたさもない漠然たる附け方で、茶の賣出しにいらくする心をじつと壓へつけてゐる。炭俵特有の附け肌である。

芭蕉のにほひ、響き附は炭俵になつて、江戸の門人に強く意識されて來たらしい。芭蕉談には炭俵の百韻から例句を引いてにほひ、響きに就いて論證してゐる。

ほろくあへの膳にこぼるゝ

ない袖を振つて見せたる物思ひ

ほろくあへは菜ごか落ごかの味噌あへである。貧しい膳まはりである。後句の物思ひはほろくあ

(見小集部七)

(見小集部七)

へから、必然聯想さるべき浪人の生活である。その物思ひはほろ／＼こいふ言葉の響きである。かう芭蕉談に説いてゐる。

芭蕉談は疑問の書である。鬼貫の幻住庵訪問の起筆に對して、それより以後の炭俵や續猿蓑に例證を求めた年代の錯誤が第一に不審である。無條件に信じられないが、芭蕉のほび、響きの旁證を炭俵から引用した一項は、その説の炭俵になつて江戸の門人に誤なく理解された事を裏書する。芭蕉談に擧げた炭俵の附句は利牛、野坡、孤屋の三吟百韻である。芭蕉の直接手を下さない三人限りの合作である。野坡たちが師の説を意識してゐないならば、その附句が不用意の間に案出される譯はないのである。

炭俵時代の芭蕉は、晝は錠おろす市隱の生活を垣の朝顔に象徴させて、深川に在庵したが、炭俵の出版された元祿七年の六月は最後の上方行脚に上つてゐる。撰集の後見をしたが、その内容には深く干渉しなかつたらしいのである。

炭俵の撰者は前記の野坡、孤屋、利牛の三人である。傲岸な許六は同門評に『元來三人ともに越後屋の手代なれば』こいふ風に輕蔑してゐるが、野坡は輕みを以て俳諧の一家をなしてゐる。蓮花庵の寂雷和尚に參禪して、後に照笛居士と號した人物である。炭俵の撰者に聊か恥しくない。

許六のいふ通り三人もお店奉公の卑しい境遇にしても、町人の俳諧である炭俵の新調を越後屋の店

(見小集部七)

から、世の中に廣く流行させた事實は否認されない。俳諧の歴史に永く記録される大きな成功である。

續猿蓑は未定稿である。

續猿蓑の俳諧を或る人格體に擬するは、未定稿なるが故に困難である。強ひて喩へれば附會の説さなるから避ける。

續猿蓑の題號から云へば猿蓑の延長であるが、その境地は炭俵に近い。炭俵の輕みを更に篩にかけて、町人式のそら／＼しさをすべて振ひ落してゐる。猿蓑の淋しさをや、引き下けて、人情の世界の淋しさを脱つてゐる。

わかれを人がいひ出せば泣く

(見小集部七)

悲しい別れを人から悔まれて、その別れの幻覺を描いて又泣くのである。第三者との對話にふくまられて發作的に泣くのである。その坐の一人が別れ話をいひ出して、一人が泣いて怨む意に取れば全く戀句の體である。それでは『人が』こいふ三人稱を挾んで、別れの場を一句の裏へ廻した技巧が無視される。

前句の『砂に這ふ棘の中の絡線の聲』を墓場と睨んで、その聯想から臨終の別れを附けたのである。

別れを對話體に扱つたところが、此の句の人情味である。

火燵の火いけて勝手をしづまらせ

泣き顔を拭いて火燵を出ながら、火の氣が強さうなので、灰をかけてこんもり高く火をいける。火を疎末にしない女らしい所作である。さて勝手を起して置いた氣の毒さから先づ寝しづまらせる。思ひやりの深い女らしい情味である。前句の對話が女同士である事は、この後句の解釋で明瞭に限定されるのである。

曲齋は別れを旅立のなげきに見立がへをしてゐる。その説も存置して、い、けれぎ、人情味の深刻な前幕を落さないで、舞臺をその愁歎の世話場に廻した方が、作者の覘ひを外さない解釋である。

續猿蓑が芭蕉の歿後に刊行された経路は、その特色の不透明なるが如く迂餘してゐる。最初の發企者は沾圃である。沾圃は江戸の能役者寶生左太夫である。彼は同役の里圃及び鷺流の狂言師馬寛と共に、芭蕉の捌きを受けた歌仙を出版しようとして起稿したのである。

その草稿が芭蕉の手に渡つて頭陀袋に收められ、元祿七年伊賀の東麓庵で、近江や伊賀の連衆の作をさし加へて、略、撰集の體裁が整つたところで芭蕉が客死したから、伊賀の松尾家へかたみに残されたのである。

京都の書林井筒屋が頻りに懇望して、元祿十一年漸く未定稿のまゝ開板される事になつて、支考が遺稿に手を入れたのであるまいか、さういふ疑惑を蕉門の人々に抱かせたのである。その疑惑は越人支考との論争に依つて看取されるが、越人は支考の削り掛の返事に對する論駁書猪の早太に、

- 一、續猿蓑に躑躅を正花に、松露を冬季に扱ひたる事。
 - 二、芭蕉に託して名月二句の評語を附記せる事。
 - 三、版本に墨消しの痕を見せて、遺稿の如く瞞着せる事。
- 右の三條項を舉げて、支考の僞撰を斷定してゐる。

要するに續猿蓑は沾圃の起稿で、芭蕉がこれを改削し、猶未定稿なるを支考の加筆したものを見るのが穩當の見解である。

俳諧七部集

冬の日

甲子吟行に貞享元年の冬名護屋に入る道の程風吟すこあり

狂歌の才子即ち竹齋なり

竹齋(ちくさい)尾張名古屋に住し、天下第一庸醫竹齋と稱し、狂歌を以て世に聞えたり

主水(もんど)宮中にて水を司る役、水取(もひどり)の略



笠は長途の雨にほころび、紙衣はごまりごまりの嵐にもめたり。佗盡したるわび人、我さへあはれに覺えける。むかし狂歌の才子、此國にたぎりし事を不圖おもひ出て申侍る。

有明の主水モンドに酒屋つくらせて荷カ野ノ芭バ蕉蕉
かしの露をふるふ赤馬重カ野ノ水ノ重重五五

髪はやす 業平、二條の後の事にて髪を切られしかば、髪はやす程を吾妻に下れるを句中に含めたり。(大鏡)

影法(かけぼうし)人影「かけぼうし」の略。

こまんが柳 攝津國田中に小萬柳あり。(大鏡)

さかしき(詰)

二の尼(このあま)天龍の官女崩御の後、第一に法牒さなれるを一の尼、次を二の尼といふ(七部木槌)

熊坂物見の松、美濃國青野村の一里塚近傍にあり(婆心録)宗祇の忘れ水、美濃の國山田の庄宮瀬川のほとりにあり(七部搜)

うらかた(占形)

秋水一斗(しうすい)漏刻(みづどけい)のこご。

二

朝鮮の細りすすきの匂ひなき 杜
日のちりくりに野に米を刈 正
我庵は鷺に宿かすあたりにて 野
髪はやす間をしのぶ身のほき 芭
偽りのつらしき乳をしほりすて 重
きえぬ卒都婆にすこく泣 荷
影法の曉寒く火を焼て 芭
あるじは貧にたへし虚家 杜
田中なるこまんが柳落るころ 荷
霧に舟ひく人はちんばか 野
黄昏を横にながむる月細し 杜
隣さかしき町に下り居る 重
五 國 水 兮 國 蕉 兮 五 蕉 水 平 國

(日の冬)

二の尼に近衛の花の盛りきく 野
蝶はむぐらにさばかり鼻かむ 芭
乗物に簾透顔おほろなる 重
今ぞ恨の矢をはなつ聲 荷
盗人の記念の松の吹をれて 芭
しばし宗祇の名を付し水 杜
笠ぬぎて無理にもぬる、北時 荷
冬枯わけてひこり唐 野
しらくみ碎けしは人の骨か何 杜
烏賊はえびすの國のうらかた 重
あはれさの謎にもさけじ時鳥 野
秋水一斗漏つくす夜ぞ 芭
三 蕉 水 五 國 水 兮 國 蕉 兮 五 蕉 水

(日の冬)

日東(じつとう)石川丈山を唐の李白に擬して稱せる語(大鏡)五車端韻に「汝陽王璿曲を打つ、明皇自ら紅檀を摘み、璿が帽上に置く」(標註)

居湯(おりゆ)釜のなき風呂籠。白氏文集「月照藤花」影上堵(標註)

おもへごも 文選「衣を千仞の岡に振ふ」の語に縁りて、俗人の境涯を侘びたる也。

鶉ふけれ 鶉啼き耽れの意。麻呂(まろ)鞆鼓(かつこ)楽器。浅香(あさか)浅香山、浅香沼なご古歌に詠まれし陸奥の名所也。

瘤(ふすべ)今いふ「こぶ」なり。

四

日東の李白が坊に月を見て
巾に木槿をはさむ琵琶打荷
牛の跡ミぶらふ草の夕ぐれに
箕に終の魚をいただけき杜
我いのり明がたの星孕むべく荷
けふは妹の眉かきにゆき野
綾ひみへ居湯に志賀の花漉て杜
廊下は藤の影つたふ也重
はつ雪のこもしも袴着てかへる野
おもへごも壯年いまだころもを振はず。
水

(日の冬)

五

霜にまだ見る薺の食杜
野菊まで尋ぬる蝶の羽をれて芭
鶉ふけれミ車ひきけり荷
麻呂が月袖に鞆鼓を鳴すらん重
桃花を手折る貞徳の富正
雨こゆる浅香の田螺堀うゑて杜
奥のきさらぎを只なきに泣野
床更て語ればいこなる男荷
縁さままたけの恨のこりし芭
口をしこ瘤をちぎるちからなき野
明日はかたきに首送りせん重
小三太に盃さらせひこつうたひ芭
蕉

(日の冬)

かぶり(掛り) 古き繩
綱にて屋上などを覆へ
る漁家の態也。

嫁(よめり)

かぶろ(禿) 今のかむろ

うぐひす 灯を入れて
鶯を誘ひ、冬より啼が
するなり。

篠(ささ)

奉加(ほうか) 佛堂造立
の寄附を募るなり。

六

月は遅かれ牡丹ぬす人 杜
繩あみのかかりはやぶれ壁落て 重
こつこつこつみのみ地藏きる町 荷
初花の世こや嫁のいかめしく 杜
かぶろいくらの春ぞかはゆき 野
櫛箱に餅するる閨ほのかなる 荷
うぐひす起よ紙燭さほして 芭
篠ふかく梢は柿の蒂さびし 野
三線からん不破の關人 重
道すがら美濃で打ける碁を忘る 芭
ねざめくのさても七十 杜
奉加めす御堂に金うち荷なひ 重
五 國 蕉 五 水 蕉 兮 水 國 兮

(日の冬)

薄様(うすやう) 薄く漉
きたる紙の名。

唐輪(からわ) 鬻の名。

臨濟(りんざい) 唐の臨
濟禪師の起せる禪宗の
一派。

秋蟬(しゅうせん)

獨活刈(うごかり) 羽越
の國境に白髪明神、獨
活刈明神を祀る、其の
神事なり。(大鏡)

七

ひみつつの傘の下舉りさす 荷
蓮池に鷺の子遊ぶ夕間暮 杜
窓に手づから薄様をすき 野
月にたてる唐輪の髪赤枯て 荷
戀せぬきぬた臨濟をまつ 芭
秋蟬の虚に聲きくしづかさは 野
藤の實つたふ雫ほつちり 重
袂より硯をひらき山かけに 芭
ひこりは典侍の局か内侍か 杜
三ヶの花鸚鵡尾長の鳥いくさ 重
しらかみいさむ越の獨活刈 荷
兮 五 國 蕉 五 水 蕉 兮 水 國 兮

(日の冬)

霞(しぐれ)蔽(か)ざる書
は誤り。

齒朶(した)今の裏白
也。

扇(あふぎ)扇形に編み
たるこみ取の具也。

相撲力(すまふちから)

杖をひく事僅に十歩。

つつみかねて月さり落す蒙哉 杜
水ふみ行水の稲づま 重
齒朶の葉を初狩人の矢に負て 野
北の御門を押あけの春 芭
馬糞かく扇に風のうち霞み 荷
茶の湯者をしむ野邊の蒲公英 正
らうたけに物よむ娘かしづきて 重
灯籠ふたつに情くらぶる 杜
露萩の相撲力を撰ばれず 芭
蕎麥さへ青し滋賀樂の坊 野
水 蕉 國 五 平 兮 蕉 水 五 國

(日の冬)

紅花(べに)染料となる
草にて奥州にて多く栽
培さる。

命婦(みやうぶ)後宮の
女官。

縣(あがた)田舎、ふる
は年経る也。

矢矧(やはき)三河、橋
の長さ二百八間あり。

朝月夜双六打の旅寐して 杜
紅花買みちにほこぎすきく 荷
しのぶ間のわざこて雛を作り居る 野
命婦の君より米なんぎ來す 重
まがき迄津浪の水にぐづれ行 荷
佛喰たる魚解きけり 芭
縣ふる花見次郎ミ仰がれて 重
五形董の畠六反 杜
うれしけに囀る雲雀ちりちりこ 芭
眞畫の馬の眠た顔也 野
岡ざきや矢矧の橋の長さ哉 杜
庄屋の松をよみておくりぬ 荷
水 蕉 國 五 蕉 兮 五 水 兮 國

(日の冬)

晦日(みそか)

詩に「笠重吳天雪」

あた人さ「南無三寶ひ
ごつの樽を吞ほして身
はあき樽にかへるふる
ささ」の狂歌の心(標
註)

白虎通に「琴ハ南方ニ
在リ籥ハ西方ニ在リ」
の趣(婆心録)

帯引(おびひき)逢引の
帯を引く也

捨し子は柴刈長にのびつらん野
晦日を寒く刀賣る年重
雪の狂吳の國の笠めづらしき荷
襟に高雄が片袖をこく芭
あだ人さ樽を棺に吞ほさん重
芥子のひさへに名をこほす禪
三日月の東は暗く鐘の聲
秋湖かすかに琴かへす者野
煮る事をゆるして沙魚を放ちける
聲よき念佛藪をへだつる荷
影うすき行燈けしに起わびて野
おもひかねつも夜るの帯引重
五水兮

(日の冬)

西行の歌に「願くは花
のもこにて春死なんそ
のきさらぎの望月の
頃」

萬葉集「難波人昔火た
く屋はすゝたれぞおの
が妻こそこめづらし
き」

花棘(はないはら)

胡麻千代祭り(ごまち
よまつり)加茂の末社、
九月上旬の午の日胡麻を
供して祭る

こがれ飛たましひ花の陰に入荷兮
その望の日を我もおなじく芭蕉
なには津にあし火焼家はすすけたれぎ
炭賣のおのが妻こそ黒からめ重
人の粧ひを鏡磨寒荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり杜國兮
鶴見る窓の月かすかなり野水
風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日芭蕉
萩織る笠を市に振する羽笠兮
加茂川や胡麻千代祭り微近み荷兮

(日の冬)

いはくら(岩倉)山城の地名。

三平(まるがほ)山谷の語に三平二満とあり。俗にお多福のこと。

紙衣(かみこ)

花に泣 曲齋は「花のあこ」をよむ可しといふ。

歎冬(くわんとう)薬草

白燕 宣旨 八十年、

いはくらの聲なつかしのころ重
 おもふ事布搗歌にわらはれて野
 うきははたちを越る三平ツル野
 捨られてくねるか鶯の離れ鳥羽
 火おかぬ火燧なき人を見ん芭
 門守の翁に紙子かりて寝る重
 血刀かくす月のくらきに荷
 霧下りて本郷の鐘七つきく杜
 冬まつ納豆たたくなるべし野
 花に泣櫻の微さすてにける芭
 僧ものいはず歎冬を吞羽
 白燕濁らぬ水に羽を洗ひ荷
 兮 笠 蕉 水 國 兮 五 蕉 笠 國 水 五

(日 の 冬)

この三句明解なし、太和竹林寺に百歳以上の男の親ある者を集め、救して玉釵を贈たる事法然上人の雑書にあるよし、鶯笠の註に見ゆ。

桂のはな「月ノ桂高サ百丈」とあり月の異名。

はやり来て正月疾癘ありし年の祝ひを繰延べて行ふを「はやり正月」といふ。

いがき(齋垣)不浄を齋戎する域内。

宣旨センジかしこく釵カシヤレを鑄る重
 八十年を三ツ見る童母ワラハ持て野
 なかだちそむる七夕のつま杜
 西南に桂のはなの蒼む時羽
 蘭の油にしめ木うつ音芭
 賤の家に賢なる女見てかへる重
 釣瓶に粟をあらふ日のくれ荷
 はやり来て撫子かざる正月に杜
 鼓手向る辨慶の宮野
 寅の日の旦を鍛冶の急起て芭
 雲かうばしき南京ナキョウの地羽
 いがきして誰とも知らぬ人の像荷
 兮 笠 蕉 水 國 兮 五 蕉 笠 國 水 五

(日 の 冬)

狩衣(かりぎ)正しくは「かりぎぬ」

鶴(こう)鶴に似て丹頂なし、俗に「かうづる」

山家の體(さんかのてい)「やまがのありさま」

具足(ぐそく)

東海道藤枝、清浄光寺に不二見の亭といふあり。(標註)

山橋(やまたちはな)藪柑子又牡丹をいふ。

獨樂庵(どくらくあん)司馬淵公の獨樂園の轉か。(標註)

泥にこころの清き芹の根重
粥すする曉花にかしこまり野
狩衣の下に鎧ふ春風芭
北のかたなくなき簾おしやりて羽
ねられぬ夢を責むら雨杜
國笠蕉水五

田家眺望

霜月や鶴のイヅナならび居て荷
冬の朝日のあはれなりけり芭
檜檜山家の體を木の葉降重
ひきずる牛の鹽こほれつ、杜
國笠蕉水五

(日の冬)

音もなき具足に月のうすうす
酌みる童蘭切にいで野
秋のころ旅の御連歌いさかりに芭
漸くはれて富士みゆる寺荷
寂(じやく)して椿の花の落る音杜
茶に糸ゆふをそむる風の香重
雉追に烏帽子の女五三十野
庭に木曾作る戀の薄衣羽
夏深き山橋にさくら見ん荷
麻かりさいふ歌の集あむ芭
江を近く獨樂庵と世を捨て重
我月出よ身はおほろなる杜
國笠蕉水五

(日の冬)

籠輿(ろうごし)籠は牢の借字。

莊子に「曳尾於泥中」みくすり(御藥)進むは勸むの誤り。
大角豆(さゝけ)

芥子尼(けしあま)禦粟の花散りて、坊主ななりたるを尼に喩ふ。

飯台(はんたい)

元政(けんせい)彦根の人、深草瑞光寺を起す。至孝にして、養の母を負ひて、身延に詣りて逸事あり。

白洲(しらす)
水干(すゐかん)貞徳時代俳諧の本式には烏帽子、大紋にて出席したりといふ。
木枯(もこ)の巻の脇句「笠の山茶花」にこの擧句を以て照應す。

追加(つゐか)右の五歌仙の追加にて表六句なり。

旅衣笛に落花を打拂羽
籠輿ゆるす木瓜の山あひ野
骨を見て坐到に泪ぐみうちかへり
乞食の簞をもらふしのめ荷
泥のうへに尾を曳鯉を拾ひ得て
御幸に進む水のみくすり重
殊に照年の大角豆の花もろし野
萱屋まばらに炭團つく白羽
芥子尼の小坊交りに打むれて荷
をるるはすのみたてる蓮の實芭
しづかさ飯臺のぞく月の前重
露おく狐風やかなしき杜
國五蕉兮笠水五國兮蕉水笠

(日の冬)

釣柿に屋根ふかれたる片庇羽
豆腐つくりて母の喪に入野
元政の草の袂も破ぬべし芭
伏見木幡の鐘花をうつ荷
色深き男猫ひみつを捨かねて杜
春の白洲の雪掃をよぶ重
水干を秀句の聖わかやかに野
山茶花句ふ笠のこがらし羽
笠水五國兮蕉水笠

(日の冬)

追加

いかに見よ難面牛をうつ霞羽
笠

ちやんせん(茶全)髪の名、謡曲木賊刈の面影か(標註)

岐阜山(ぎふやま)美濃。

天和四甲子年十月改元貞享、芭蕉年四十一。

樽火にあぶる枯原の松荷
木賊刈下着に髪をちやせんして重五
檜笠に宮をやつす朝露杜
銀に蛤かはん月は海芭蕉
ひでりに橋をすかす岐阜山野水

貞享甲子歳

(日の多)

春の日

曙見む三人々の戸扣あひて、熱田のかたにゆきぬ。
渡し船さわがしくなりゆく頃、並松のかたも見え
わたりて、いこ長閑なり。重五が柴折おける竹塙
ほごちかきに立より、今朝のけしきをおもひ出侍
る。

二月十八日

春めくや人さまさまの伊勢参り荷
櫻ちる中馬ながく連重五
山霞む月一時に館立て雨桐
燈ながらの火にあたる也李風

(日の春)

重五 名古屋の郊外足尾村に別荘あり(十寸鏡)竹塙(たけがき)

四句目軍體なり。表にこれを嫌へども構はず附けたり。

笛 敦盛遺愛の青葉の
笛をいふか。
文王(ぶんのう)支那周
代の聖天子

有晨(ありあけ)古本長
明は誤字(標註)

鳥居より 鎌倉八幡は
鳥居より十八丁、砂深
し(大鏡)

梓(あづき)巫子にて
「あづきみ」のこと。

針立(はりたて)鍼醫に
て五位に準せられしを
いふ。

我名を 米屋太郎介の
身代を掛けし大阪の太
郎介橋をいふか(婆心
録)

HC

汐風によくよく聞ば鳴なく 昌
くもりに沖の岩黒く見え 執
須磨寺に汗の帷子脱かへむ 重
おのおのなみだ笛を戴く 荷
文王の林にけふも土つりて 李
雨の雫の角のなき草 雨
肌寒み一度は骨をほさく世に 荷
傾城乳をかくす有晨 昌
霧拂ふ鏡に人の影移り 雨
わやわやさのみ御輿かく里 重
鳥居より半道奥の砂行て 昌
花に長男の紙薦あぐる頃 李
風 圭 五 桐 圭 兮 桐 風 兮 五 筆 圭

(日の春)

柳よき陰ぞここらに鞠なきや 重
入かかる日に蝶いそぐなり 荷
うつかりミ麥なぐる家に連待て 李
顔懐に梓きき居る 雨
黒髪をたばぬるほぎに切残し 荷
いさもかしこき五位の針立 昌
松の木に宮司が門はうつぶきて 雨
はだしの跡も見えぬ時雨ぞ 重
朝朗豆腐を薦にさられける 昌
念佛寒けに秋あはれ也 李
穂蓼生ふ藏を住ひに侘なして 重
我名を橋の名に呼ぶ月 荷
兮 五 風 圭 五 桐 圭 兮 五 筆 圭

(日の春)

ほこぎす 芭蕉の句
に「芋洗ふ女西行なら
は歌よまむ」の作あり。

世にあはぬ 平家物語
小督の局なご。

野水亭(やすいてい)名
古屋(念屋町)
なら坂(奈良坂)奈良の
北入口、般若路のつ
き。

傘の内近付になる雨の昏に 李 風
朝熊下る出家ほくく 雨 桐
ほこぎす西行ならば歌讀ん 荷 兮
釣瓶ひみつを二人してわけ 昌 圭
世にあはぬ局涙に年こりて 雨 桐
記念にもらふ嵯峨の昔畑 重 五
いく春を花ミ竹ミにいそがしく 昌 圭
弟も兄も鳥こりにゆく 李 風

(日の春)

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら 旦 菓

かたぐ 寺々と同じ

大秦祭(うづまさまつ
り)九月十二日山城葛
野郡大秦牛祭をいふ。

國訛を聞きて故郷をな
つかしむ也。

おもしろう霞むかたぐの鐘 野 水
春の旅節供なるらん袴着て 荷 兮
口すすぐべき清水ながるる 越 人
松風にたふれぬほこの酒の酔 羽 笠
賣残したる虫はなつ月 執 筆
笠白き太秦祭過にけり 野 水
菊ある垣によい子見ておく 旦 菓
表町ゆづりて二人髪剃ん 越 人
曉いかに車ゆくすぢ 荷 兮
鱧負て大津の濱に入にけり 旦 菓
何やら聞ん我國の聲 越 人
旅衣あたま斗りを蚊屋かりて 羽 笠

(日の春)

万日の原(まんにちの
はら)嵯峨にあり秋會
式なごのさまにや(十
寸鏡)

湯の山(ゆのやま)攝津
有馬湯の山權現(大鏡)

大年(おほとし)大晦日
のこご浄土寺のさま也
(婆心録)
ものこご無我に 正直
一遍なること
杓杞(く)垣根などに
用ふ。

麥の粉(むぎのこ)麥こ
がしなり。
攝津金龍寺の千觀、馬
を曳きて旅人の往來を
たすく(大鏡)

此卷月四つ出たり。三
句短句にて、長句に廿
九日の月を出せる一奇
と云ふべし。(標註)

萩ふみ たふす 万日の原 野水
里人に 薦コモを施す 秋の雨 越人
月なき 浪に重オモ石シおく 橋羽 笠
ころひたる 木の根に 花の鮎アヲみらむ 野水
諷ひ盡せる 春の湯の山 旦 野水
のさけしや 筑紫の袂 伊勢の帯 越人
内侍のえらぶ 代々の眉の圖 荷 兮
物思ふ 軍の中は 片脇に 羽 笠
名もかち 栗ト爺ヂヤ申上ケ 野水
大年は 念佛唱ふる えひす 棚 旦 野水
ものごご 無我によき 隣也 越人
朝夕の若葉のために 枸杞クキうるゑて 荷 兮
今 人 菓 水 笠 兮 人 菓 水 笠

(日の春)

都に廿日は やき 麥の粉 羽 笠

一夜かる 宿は馬かふ 寺なれや 野水

こは魂まつる きさらき 月 旦 菓

陽炎のもえ 残りたる 夫婦にて 越人

春雨袖に 御哥ミカいた だく 荷 兮

田を持って 花見る 里に生れけり 羽 笠

力の筋をつぎし 中の子 野水

漣ナギや三井の末寺の 跡アトさりに 旦 菓

高びくのみぞ 雪の山ヤマく 越人

見つけたり 廿九日の 月寒き 荷 笠

君のつごめに 氷ふみ わけ 羽 笠

(日の春)

三月十六日、日葉が田家にこまりて

額(ひたへ)

まじく 見る也。 いぶかりて

施餓鬼(せがき)無縁の 亡靈を弔ふ佛式。

ひたるき(空腹)

蛙のみ聞てゆゆしき寢覺哉野
 額にあたる春雨のもり旦
 炭煮る岩木の臭き宿かりて越
 まじく人を見たる馬の子荷
 立てのる渡しの舟の月影に冬
 蘆の穂を摺る傘の端執
 磯際に施餓鬼の僧の集りて旦
 岩の間より藏見ゆる里野
 雨の日も瓶焼やらん煙たつ荷
 ひたるき事も旅のひこつに越
 人兮水菓筆文兮人菓水

(日の春)

拾遺集「我こそはえも 岩代の結び松千させを ふこも誰かこくべき」の歌意を轉用す(大鏡)

和名(わめし)和名抄、 從四位下源順の撰也。

四の宮(しのみや)大津の廓也。

簀の子茸(すのたけ)婆心録に「簀の子草」に誤る。

尋よる坊主は住まず錠おりて野
 解てやおかかん枝むすふ松冬
 今宵は更けたりこてやみぬ。
 同十九日、荷兮室にて、

咲わけの菊にはをしき白露そ越
 秋の和名にかかる順旦菓人
 初雁の聲にみづから火を打ぬ冬
 別の月になみだあらはせ荷兮
 跡ぞ花四の宮よりは唐輪にて旦
 春行道の笠もむつかし野水
 永き日や今朝を昨日に忘るらん荷
 簀の子茸生ふる五月雨の中越
 人兮水菓筆文兮人菓水

(日の春)

紹鷗(せうおう)大黒庵
と號す、利休の師、永
祿元年没す。
井蛙抄に爲政連歌の席
にて、山柴を折りて籠
に入れ、其のひゞきを
止めたる話あり(婆心
録)

鳥羽(とば)志摩の港、
あらまし(豫期)こゝは
旅の日程なり。

紹鷗か瓢はありて米はなく野水
連哥のもこにあたるいそがし冬
瀧壺に柴押まけて音こめん越
岩苔こりの籠にさけられ旦菓
むさほりに帛着てありく世の中は冬
筵二枚もひろき我庵越人
朝毎の露あはれさに麥作る旦菓
碁打を送るきぬくの月野水
風のなき秋の日舟に網入よ荷
鳥羽の湊の踊わらひに冬文
あらましのざこね筑摩も見て過ぬ野水
つらく一期聲の名もなし荷今

(日の春)

岨(そは)石山の土を戴
くをいふ(標註)

土器(かはらけ)

我春の若水汲に晝起て越人
餅を食つつ祝ふ君が代旦菓
山は花所残らず遊ぶ日に冬文
曇すてらず雲雀鳴也荷今

追加

三月十九日舟泉亭

山ふきのあぶなき岨のくつれ哉越人
蝶水のみにおるる岩橋舟泉
きさらぎや餅洒すべき雪ありて聽雪
行幸のため洗ふ土器盃髭

(日の春)

後鳥羽院の御宇の番鍛冶か。(標註)

昌陸(しやうりく)里村氏連歌師也。玉松の葉のあり敷や御代の春の作者。

芍薬園(しやくやくゑん)貞徳の別荘也。

白氏文集に「暖牀斜臥日曛腰」(標註)

けふさてもきのふ子の日、けふ丑の日なるをいふ。

のがれたる世を遁れたるにて隠遁者。

酒はやし杉の葉を束ねて、酒屋のしるしに擔につるしあり。

朔日を鷹もつ鍛冶のいかめしく
月なき空の門はやくあけ
執筆

春

昌陸の松こは盡ぬ御代の春
元日の木の間の競馬足ゆるし
初春の遠里牛のなき日哉
けさの春海は程あり麥の原
門は松芍薬園の雪寒し
鯉の音水ほのくらく梅白し
舟くの小松に雪の残りけり
旦羽泉桐圭五重

(日の春)

曙の人顔牡丹霞にひらきけり
腰てらす元日里の睡りかな
星はらく霞まぬ先の四方の色
けふさても小松負らん牛の夢
朝日二分柳の動く匂ひ哉
先明て野の末ひくき霞かな
芹摘みてこけて酒なき瓢哉
のがれたる人の許へ行きて、
見かへれば白壁いやし夕霞
古池や蛙飛こむ水の音
傘張の睡り胡蝶のやさり哉
山や花垣根垣根の酒はやし
龜洞

(日の春)

選集抄に西行、信濃佐野にて、行人の足跡より遁世者を訪へる話あり(大鏡)

花に埋れて夢より直に死んかな 越人

春野吟

足跡に櫻を曲る庵ふたつ 杜國

麓寺かくれぬものは櫻哉 李風

榎木まで櫻の遅き詠めかな 荷今

餞別

藤の花たたうつふいて別かな 越人

山畑の茶摘をかさす夕日哉 重五

蚊ひこつに寝られぬ夜半ぞ春の暮 同

夏

ほこきすその山鳥の尾は長し 九白

さゆ(素湯)

ですかけ(篠懸)木綿しでに死出を言ひ掛く。

老聃(らうたん)支那古代の思想家老子也。

ほこきすそのみ焼てぬる夜哉 李風

かつこ鳥板屋の背戸の一里塚 越人

うれしさは葉かくれ梅のひみつ哉 杜國

若竹のうら踏たるる雀かな 龜洞

傘をたたまたまて螢見る夜かな 舟泉

武藏坊をこふらふ

すずかけやしてゆく空の衣川 商露

逢坂の夜は、笠見ゆるほこに明て

馬替ておくれたりけり夏の月 聽雪

老聃曰知れ足之足常足

夕顔に雑炊 暑き藁屋かな 越人

箒木の微雨こほれて鳴蚊哉 柳雨

はき木(籬木)其の姿
近寄れば、紛れて見え
ず云ひ傳ふ。
萱草(くわんさう)五月
花開く。

譬言品(ひゆほん)法華
經にあり。

きりくす今いふ蟬
こころきなり。
玉祭(たままつり)

瓦わふく齋宮の忌み詞
にて寺をいふ。
八嶋 平家の敗じせる
古戦場なり。

唐黍(たうきび)今の
たうもろこしなり。

ははき木はなかむる中に昏にけり 塵交
萱草は随分暑き花の色 荷兮
蓮池の深さわするる浮葉哉 同
曉の夏陰茶屋の遅きかな 昌圭
夏川の音に宿かる木曾路哉 重五
六月の汗ぬくひ居る臺哉 越人
譬言品の三界無安猶如火宅ヒヨウホシ ユビョウカクタクいへる心を
背戸の畑なすび黄はみてきりくす 旦葉
貧家の玉祭
魂まつり柱にむかふ夕かな 越人

秋

(日の春)

雁ききて又一寝入する夜哉 雨桐
雲折く人を休むる月見かな 芭蕉
山寺に米搗ほきの月夜哉 越人
瓦わふく家も面白や秋の月 野水
八島をかける屏風の繪を見て
具足着て顔のみ多し月見船 野水
待戀
來ぬ殿とのを唐黍たうき高し見おろさん 荷兮
閑居増戀
秋ひこり琴柱かづはつれて寝ぬ夜哉 荷兮
朝顔は末一りんに成にけり 舟泉

(日の春)

冬

貞享元年、芭蕉を大垣の如行宅にさしめたる時の吟也。

行灯(あんどん)

馬はぬれ牛は夕日の村しくれ 杜國
 芭蕉翁を宿し侍りて
 霜寒き旅寢に蚊屋を着せ申す 大垣住 如行
 雪の原 薺の子の薄かな 昌 碧
 馬をさへなかわる雪のあした哉 芭蕉
 行灯の煤けぞ寒き雪のくれ 越 人
 芭蕉翁をおくりてかへる時
 此頃の氷ふみわる名残哉 杜 國
 隠士にかりなる室をまうけて
 あたらしき茶袋一つ 冬籠 荷 兮

(日の春)

貞享三丙寅年仲秋下浣

(日の春)

蓬左(ほうさ)熱田の神宮を蓬萊宮といふよ
り、宮の驛なる荷兮の
榎木堂をさして云へる
也。

ひこ、せ(一年)貞享元
年也。

朗詠集「霞はれみざり
の空ののさけくである
かなきかにあそぶいこ
ゆふ。」
山家集「雲雀たつあら
野におふる姫百合の何
につくごもなきこゝろ
かな」
野守(のもり)撰者荷兮
を擬したり。

阿羅野

尾陽蓬左、榎木堂主人荷兮子、集を編て名をあら野といふ。何故に此名ある事を
しらす。予はるかにおもひやるに、ひこせ、此郷に旅寝せし、をりをりの言捨、
あつめて冬の日こいふ。其日かけ相續きて、春の日また世にかかやかす。けにや
衣更着彌生の空のけしき、柳櫻の錦をあらそひ、蝶鳥のおのかさまくなる風情
につきて、いささか實をそこなふものあればにや。糸ゆふのいこかすかなる心の
はしの有かなきかに、たごりて、姫ゆりの何にもつかす、雲雀の大空にはなれて、
無景のきはまりなき、道芝のみちしるへせんこ、此野の原の野守こはなれるべら
し。

元祿二年彌生

芭蕉桃青

(野 曠)

荒野集目錄

卷之一	花。	郭公。	月。	雪。
卷之二	歳旦。	初春。	仲春。	暮春。
卷之三	初夏。	仲夏。	暮夏。	
卷之四	初秋。	仲秋。	暮秋。	
卷之五	初冬。	仲冬。	歳暮。	
卷之六	雜。			
卷之七	名所。	旅。	述懐。	戀。
卷之八	釋教。	神祇。	祝。	無常。
員外				

(野 曠)

曠野集卷之一

花三十句

よしのにて

これはこれはさばかり花の芳野山貞室
 我まゝをいはする花のあるし哉路通
 薄くもり氣たかく花の林かな信徳
 はなの山こころまへて歌よまむ晨風
 暮淋し花の後の鬼瓦友五
 山里に喰ものしひる花見かな尙白
 何事そ花見る人の長刀去來

(一之卷野曠)

これはこれは一本草、未得撰、寛文九年刊に此の句出づ。

長刀ながったな

山崎宗鑑、讃岐、琴弾山の邊に庵を構へ、上は來ず中は來て居す下は一夜中來るは下々下の客と狂詠し、一夜庵と號したり。

一本「おそし」とあるは誤り。

みねの雲すこしは花もましるへし野水
 花の中下戸引て來るかひな哉亀洞
 下々の下の客さいはれん花の宿越人
 花の山常折くふる枝もなし一井
 見上しかふもこになりぬ花の瀧津俊似
 兄弟のいろはあけけり花の時鼠津島
 ちる花は酒ぬす人よく舟泉
 冷汁に散てもよしや花の陰胡及
 はつ花に誰傘ぞいましまし長虹
 柴舟の花咲にけり宵の雨津島枝
 折時になりて逃けり花の枝岐鳥歩
 連たつや従弟はおうし花の時荷一兮

(一之卷野曠)

なりあひ(偷安)

こけら(桂)板屋を葺く
薄板。

ある人 洛外鳴瀬に隱
栖せる三井秋風の事
也。

杜宇二十句 小みたし
に斯くあれど十九句な
り落句あるにや可惜。
(標註)

江戸新道、言水撰、延
寶六年刊に「鎌倉にてし
さ前書あり。

負(おひし)

瘡瘡の跡まだ見ゆる花見哉傘
 ありけなや風車賣花の時薄
 花に来てうつくしく成ころ哉た
 山あひの花を夕日に見出したり心
 おもしろや理窟はなしに花の雲越
 なりあひやはつ花よりの物わすれ野
 獨来て友選ひけり花の山冬
 花鳥こけら葺るる尾上哉冬
 首出して岡の花見よ鮑こり荷
 酒のみ居たる人の繪に松
 月花もなくして酒のむひこり哉芭
 ある人の山家にいたりて蕉

(一之巻野噴)

櫃の木の花にかまはぬすかた哉芭蕉

杜宇二十句

時鳥を詞おくものに、求得て放やる時に、

鳥籠の憂目見つらんほこきす季
 目には青葉山ほこきす初かつを素
 いそかしき中に聞けり蜀魂釣雪
 蠟燭の光りにくしやほこきす越
 負し子の口まねするや時鳥津松
 跡や先氣のつく野邊のほこきす重
 ほこきすきれからきかむ野の廣さ柳
 ある人の許にて發句せよ、こ有ければ風

(一之巻野噴)

はゞかり(憚)

淀(よさ)山城、時鳥の名所也、拾遺集、いつかたに鳴て行らんほこたきす淀のあたりのまた夜ふかきに(大鏡)

くらがり(闇)

歌がるた百人一首後徳大寺左大臣の「た、有明」の歌を踏む。

四四

ほこきすは、かりもなき鳥かな 鼠 弾
 晴ちきる空鳴行やほこきす 落 梧
 蚊屋臭き寝覺うつつや時鳥 一 髮
 三聲ほこ跡のおかしや郭公 同
 淀にて
 ほこきす十日もはやき夜船哉 風 泉
 嬉しさや寝入らぬ先のほこきす 岐 杏 阜
 あぶなしや今起てきく時鳥 傘 下
 くらかりや力かましきほこきす 同 可
 馬さ馬呼りあひけりほこきす 鈍
 たたありあけの月そ残れる、こ吟しられしに、
 歌がるたにくき人かなほこきす 大 智 月

(一之卷野曠)

うつふき(俯臥)

はひさり(奪取)人々争ひて、月を賞玩するをいへり。

けうさ(氣疎)

月三十句

うつかりミうつふき居たり時鳥 李 桃
 うつかりミ春の心そほこきす 市 山
 かるかるミ笹のうへ行月夜哉 十二歳 梅 舌
 それかしも月見る中の獨かな 湍 水
 月ひこつはひさりかちの今宵哉 一 雪
 雨の月さこきもなしの薄明り 越 人
 けうささにすこし脇むく月夜哉 津 昌 碧
 屋わたりの宵はさひしや月の影 市 島 柳
 をかしけにほめて詠る月夜かな 一 髮
 まこまでも見まほす月の野中哉 長 虹

四五

(一之卷野曠)

いかい(殿)大の意。

紀納言の詩「十二廻中
无_レ勝_ニ於_レ此夕之好_コ」
(大鏡)
かい(權)

むつかし(難)

峠迄硯抱へて月見かな任他
 ひみつ家やいかいこみ見るけふの月亀洞
 名月は夜明るきはもなかりけり越人
 名月やこしに十二は有なから文鱗
 名月やかい突たててつなく舟昌碧
 名月やはだしてありく草の中傘下
 名月や鼓の聲さ犬のこゑ二水
 見るものこ覚えて人の月見哉野水
 名月の心いそきに
 むつかしこ月を見る日は火も焼かし荷
 いつの月もあこを忘れて哀也同
 名月や海もおもはす山も見す去
 來

笈日記、支考撰、元祿八年刊に「大會根成就院の歸るさ」前書ありて、有さあるたさへにも似す三日の月」

名月や下戸ミ下戸ミのむつましき胡及
 名月はありきもたらぬ林かな釣雪
 宵に見し橋はさひしや月の影一髪
 十三夜
 影ふた夜たらぬほこ見る月夜哉杉風
 朔日
 暮いかに月の氣もなし海の果荷兮
 二日
 見る人もたしなき月の夕かな荷兮
 三日
 何事の見たてにも似す三日の月芭蕉
 四日

銀河(あまのかは)

諸曲自然居士に「船頭殿の御顔のいろ直りて候」(標註) 味與衛、桃隣撰、元祿八年刊「いささらは」であるは再案にや。

夕月夜行灯けしてしはし見んト

五日

何日さも見さためかたや宵の月

六日

銀河見習ふ頃や月のそら

七日

能ほさにはなして歸る月夜哉

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭さの顔の色 其 芭 蕉
いさゆかん雪見にころふ所まで

四八

(一之卷野噴)

ものかけの雪の片側
にのみ積りて、かけさ
なる方には降らぬをい
ふ。

おしにきる(押握る)雪
をつかみ取りたる也。

竹の雪落て夜るなく雀かな

かさなるや雪のある山只の山

車道雪なき冬のあしたかな

はつ雪を見てから顔を洗ひけり

はつ雪に戸明ぬ留主の庵哉

ものかけのふらぬも雪のひみつ哉

くらき夜に物陰見たり雪の隈

雪ふりて馬屋にはひる雀かな

夜の雪おささぬやうに枝折らん

雪の日や川筋はかりほそく

はつ雪やおしにきる手の奇麗也

雪の江の大舟よりは小舟哉

四九

交 生 春 人 幸 芳 水 仙 風 汀 下 川

(一之卷野噴)

乾鮭(からさけ)今の鹽
引鮭にあらす、燻製に
似たるもの也。

雪の朝乾鮭わくる聲高し冬
雪の暮猶さやけしや鷹の聲桂夕
ちらくや泡雪かかる酒強飯荷兮
はつ雪や先草履にて隣まで路通
はかられし雪の見所ありこころ野
舟かけていくかふれさも海の雪芳
川水

五〇

(一之卷野曠)

曠野集卷之二

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春
たれ人の手からもからし花の春
わか水や凡千年のつるべ繩風鈴
松かさり伊勢か家買人は誰其角
歌か否連哥にあらずにし肴文鱗
月雪のためにもしたし門の松去
かざり木にならで年ふる柏哉一
元朝や何さなけれさ遅さくら路
元日は明すましたるかすみ哉
笑

五一

(二之卷野曠)

笈の小文に「宵のさし
空の名残おしまむさ酒
のふかして元日寝わ
すれたれば」前文あ
り

伊勢が家伊勢の御
東洞院に住ひたるが
古今集に其家を賣りて
よめる歌に「あすか川
淵にもあらぬわがやど
も瀬にかはり行ものぞ
ざありける」

齒固(はがため)
ふたつこそ白氏文集
 「忽因時節驚年幾四
 十如今見二年此一
 年二年に取なしたり
 (大鏡)」

御木(みき)伊勢太神
宮の御造材にて御木曳
 「おこしき」もいふ。

小柑子(せうかうじ)

齒固に梅の花かむにほひかな
 ふたつこそ老にはたらねさしの春
 若水をうちかけて見よ雪の梅
 伊勢浦や御木引休む今朝の春
 こそふきの名をつけて見ん宿の梅
 去年の春ちひさかりしか芋頭
 小柑子栗やひろはん松の門
 よし男千秋樂を習ひけり
 山柴にうら白ましる竈かな
 松高し引馬つるる年をこそ
 月花の初は琵琶の木さり哉
 連て來て子にまはせけり萬歲樂

大垣
 如
 行
 落
 龜
 同
 同
 元
 昌
 同
 舟
 同
 重
 同
 同
 釣
 同
 雪
 井

(一之巻野噴)

ふかいの面能の面に
 て瘦たる女の貌也(大鏡)

の宮(野のみや)山城
 小倉山の巽の藪中にあり(標註)

大服(おほぶく)茶を點
 し塩梅(しお)山椒(さんしやう)を茗碗(めいおん)に
 漬けて飲む也(標註)

うら白もはみちる神の馬屋哉
 見覚えんこや新玉の年の海
 今朝こ起て繩ふしほぎく柳かな
 さほ姫やふかいの面いかならん
 蓬菜や舟の匠のかんなくつ
 佛より神そたうさき今朝の春
 の宮やさしの旦はいかならん
 かさりにこそ誰か思ひだすたわら物
 正月の魚のかしらや炭たわら
 今朝の春寂しからさる閑かな
 あひあひに松なき門もおもしろや
 大服は去年の青葉の匂ひかな

胡
 長
 鼠
 同
 湍
 京
 冬
 冬
 傘
 冬
 柳
 防
 川
 及
 虹
 彈
 水
 め
 什
 文
 下
 松
 風
 川

(二之巻野噴)

さうぶくら(胴彫)

元慶八年濱名の橋を造る、長さ五十六丈。其後地震にて跡形なし。

巳の年(みのとし)元祿二年、曠野撰集の年也。

鶯の聲聞まるれ年男五十四犬山
 傘に齒朶かかりけりえ方柳夕道勝
 袖すりて松の葉契る今朝の春梅舌
 たて、見む霞やうつる大かかみ野水
 曙は春の初めやさうぶくら同人
 はつ春のめてたき名也堅魚々く越人
 初夢や濱名の橋の今のさま同
 しづやしづ御階にけふの夢厚し荷兮
 萬歳の宿を隣に明にけり同
 巳の年やむかしの春のおほつかな同
 我は春目かきに立るまつ毛かな僧貞般齋
 我等式か宿にも來るや今朝の春貞室

(二之卷野曠)

初春

若菜つむ跡は木を割畑かな越人
 精出して摘まも見えぬ若菜哉津島野水
 七くさをたたきたかりて泣子哉加賀似
 女出て鶴たつあまの若菜かな小春
 側濡て袂の重き磯菜哉岐素羅
 吾裏も残しておかぬ若菜哉素秋
 石釣てつほみたる梅折しけり立察
 鷹居て折にもさかし梅の花鷗歩
 うめの花もの氣にいらぬけしき哉越人
 藪見しれもぎりに折らむ梅の花梧落

拾遺集「家づこにあまたの花も折べきにねたくも鷹をすゑてける哉」(大鏡)

(二之卷野曠)

すはえ(氣條)細長く伸
びたる枝也。

民部(みんぶ)足代氏、
弘氏、胡來亭と稱す。
伊勢山田の人。

梅折てあたり見廻す野中かな 一
花もなき梅のすはえそ頼母しき 冬
みのむしもしれつる梅のさかり哉 蕉
笠 松 髮

網代民部の息に逢て

梅の木になほやぎり木や梅の花 芭
鶯の啼そこなへるあらし哉 長
鶯の啼や餌ひろふ片手にも 去
あけほのや鶯さまるはね釣瓶 伊
鶯にちひさき藪も捨られじ 津
鶯の聲に脱たる頭巾かな 同 柳
鶯になじみもなきや新屋敷 同 夢
鶯に水汲こほすあしたかな 梅
舌

(二之卷野曠)

笈の小文に「や、かけ
ろふの一二寸」とあり。

當座題(たうざのたい)
即題也。

兒(ちご)

つま(端)磨のはづれを
云ふ。(標註)

里霞む夕を松の盛かな 野
行くて程のかはらぬ霞かな 塵
行人の簑をはなれぬ霞かな 冬
かれ芝やまだかけろふの一二寸 芭
かけろふや馬の眼のしろく 傘
水仙の見る間を春に得たりけり 路
蝶鳥を待るけしきやもの、枝 荷
今 通 下 蕉 文 交 水

(二之卷野曠)

さし木

つきたかみ兒のぬき見るさし木哉 舟
泉

接木

つまの下かくしかねたる繼穂哉 傘
下

望一(もいつ)杉木氏、
勾當望都、盲人、句を
作るごとに紙紙に書か
せ、竹の筒に入れ置き
しと也。

白尾鷹(しらをのたか)
唐崎大納言、鶴の君し
らすといふ白羽を繼尾
して、鷹狩に用ひたる
に始まる。(大鏡)

椿

曉の釣瓶にあがるつばきかな 荷 兮

同

藪深く蝶氣のつかぬ椿かな ト 枝

春雨

はる雨はいせの望一かこより哉 湍 水

同

春の雨弟さもを呼てこよ 鼠 彈

白尾鷹

はやふさの尻つまけたる白尾哉 野 水

蛛の園に春雨かかる雫かな 奇 生

立白に若草見たる明屋哉 十一歳 助

芭蕉曰、相似たる句は、
集に出す時はわざと一
所に置侍れと也(標註)

蘭亭(らんでい)支那の
書家王羲之をいふ。

直(すく)まつすくにて
枝の垂れざるをいへ

すこくくミ親子摘けりつくくくし 舟 泉

すこくくミ摘やつますやつくくし 其 角

すこくくミ案山子のけけり土筆 蕉 笠

土橋や横にはえたるつくくくし 壩 車

川舟や手をのへてつむつくつくし 冬 文

つくつくし頭巾にたまるひみつより 青 江

蘭亭の主人池に鷺を愛せられしは、筆意有故也。

池に鷺なし 假名書習ふ柳陰 素 堂

風の吹かたを後のやなきかな 野 水

何事もなしミ過行柳かな 越 人

さし柳た、直なるもおもしろし 一 笑

尺はかりはやたわみぬる柳哉 小 春

すがれ(緋)

わがなり(我形)柳それ
自身の姿也。

すかれく柳は風にこりつかん一
 ざりつきて筏をこむる柳哉昌
 さはれこも髪ゆかまぬ柳哉杏
 みしかくて垣にのかる柳哉此
 ふく風に牛のわきむく柳哉杏
 吹風に鷹かたよせるやなぎ哉松
 風ふかぬ日はわかなりの柳哉校
 いそがしき野鍛治をしらぬ柳哉荷
 蝙蝠にみたる月柳かな同
 青柳にもたれて通す車哉素
 引いきに後へころふ柳かな鷗
 菊の名は忘れたれこも植にけり生
 林

六〇

(二之巻野痕)

仲春

麥の葉に菜の花かよる嵐哉不
 菜の花や杉菜の土手のあひくに長
 なの花の座敷にうつる日影哉傘
 菜の花の畦うち残すなかめ哉清
 うこくこも見えで畑うつ籠哉去
 万歳を仕舞てうてる春田哉昌
 椿まで折そへらるさくら哉越
 廣庭に一本植しさくらかな笑
 さきくは簀干さくら咲にけり除
 手のミくほこはをらる櫻哉一
 橋

六一

(二之巻野痕)

うこくこも「見えて」
と清みても解すれど、
古本濁點あり見えず
の意なり。

あふのき(仰向)あほむ
き也。

つら(頰面)

宗鑑、時の女院の御車
の前にて、吟じたる發
句なりと云り。

すへり(江り)

うしろより見られぬ岨のさくら哉 冬
すこくミ山や暮けん遅さくら 一
春風に力くらふる雲雀かな 野
あふのきに寝て見ん野邊の雲雀哉 除
高聲につらを赤むる雉子かな 一
行かより輪繩解てやる雉子かな 壇
手をついて歌申あぐる蛙かな 山宗
啼立て入相きかぬかはつがな 落
あかつきをむつかしさうに啼蛙 越
いくすへり骨をる岸の蛙哉 去
飛入てしはし水ゆく蛙かな 津落
不圖飛て後に居なほる蛙かな 松島
下 梧 來 人 梧 鑑 車 雪 風 水 髮 松

唐網(たうあみ)さあみ
也。網を投けて魚を捕
る也。

乗らぬは乗らずにて、
打消のぬの意也。

ゆふ闇の唐網に入る蛙かな 一
はつ蝶を兒の見出す笑ひかな 柳
椽欄の葉にしまらて過る胡蝶哉 梅
かや原の中を出かぬる胡蝶哉 炊
枯芝や若葉たつねて行胡蝶 百 歲
玉 餅 風 井

暮春

何の氣もつかぬに土手の董哉 忠
ねふたしミ馬には乗らぬ董草 荷
ほうろくの土さる跡は董かな 野
晝はかり日のさす洞の董かな 舟
草刈て董撰出す童かな 鳴
歩 泉 水 兮 知

あさみ(薊)
塘(つゝみ)

笈の小文に大和國「西河にて」と前書あり。

さりつきて 岩に取すがりて也。

行蝶のしまり残さぬあさみかな 燭遊
麥畑の人見るはるの塘かな 杜國
はけ山や朧の月のすみ所 大坂式 芭蕉之
ほろほろさ山吹ちるか瀧の音 野
松明に山吹うすし夜のいろ 野
山吹ミ蝶のまきれぬあらしかな ト
一重かミ山吹のそくゆふへかな 岐襟阜
さりつきて山吹のそく岩根哉 同 蓬雨雪枝水
あそふこもゆくこもしろらぬ燕哉 去 來
去年の巢の土ぬり直す燕哉 俊 似
いま来たさいはぬはかりの燕哉 長 之
燕の巢を覗行雀かな 長 虹

たて出され 戸を仰さ
れて出しをくひたる
也。

山まゆ(やまゆ)

糖蝦(あみざん)の魚醬
(しほから)也。(標註)

黄昏にたて出されたる燕かな 鼠彈
友滅て啼音かひなや夜の雁 旦菓
角落てやすくも見ゆる小鹿哉 蕉笠
なら漬に親よふ浦の汐干哉 越人
親も子も同じ飲人や桃の酒 傘下
人霞む舟ミ陸この汐干かな 三輪友 重
山まゆに花咲かぬる躑躅哉 荷兮
朧夜やなかくてしろき藤の花 兼 正
篝火に藤のすすけぬ鶺鴒舟かな 龜 洞
永き日や鐘撞跡もくれぬ也 ト 枝
永き日や油しめ木のよわる音 野 水
行春のあみ塩からを残りけり 同

曠野集卷之三

初夏

肖柏(せうはく)牡丹花
と號す、宗祇の門人、和
泉界に住す。大永七年
没す。

髭に燒 宗祇は髭を愛
し、肖柏は香を愛せる
を以て也。
山路にて 貞享五年秋
葉山にての吟也。

ころもかへや白きは物に手のつかす路通
更衣襟もをらすやたたくさに傘下
ころもかへ刀もさして見たき哉鼠彈
肖柏老人のもちたまひし嵐山いふ香を馬のはな
むけに、文隣かくれけるこて、雪のあした、越人
の持來たるを忘れかたく、明る若葉の頃、文隣に
申つかはしける。
髭に燒香もあるへし更衣荷今
山路にて

(三之卷野曠)

ひみつ葉(石華)笈日記
には「ひみつ葉の一葉
かな」とあり。
いちみつ(一八)紫羅傘
さもいふ草花也。

ゆあび(湯浴)
方寮(けんれう)前に
立寄とありたると同人
か。

夏來てもたたひみつ葉のひみつ哉芭蕉
いちみつはをまこなるらん杜若一井
柿の木のいたり過たる若葉哉越人
切かぶの若葉を見ればさくら哉不交
若葉からすくななかめの冬木哉同藤蘿
わけもなくその木くの若葉哉龜洞
ひらひらこ若葉にままる胡蝶哉竹洞
ゆあひして若葉見に行夕かな鈍可
はけ山や下行水の澤卯木夢々
上ヶ土にいつの種こて麥一穂立寮
枯色は麥はかり見る夏野哉生林
麥刈て桑の木はかり残りけり作者不知

(三之卷野曠)

しらけし(白芥子)

深川六間堀芭蕉庵にての吟なるべし。

菊の塵、園女撰に「酔もせで篠にみたる、螢哉さくらゐ基佐」

麥からにしかる、里の葵かな鈍可
 しらけしにはかなや蝶の鼠いろ嵐蘭
 鳥飛てあぶなきけしの一重哉落梧
 けし散て直に實を見る夕哉岐李阜桃
 大粒な雨にこたへしけしの花東巡
 散たひに兒そ拾ひぬけしの花吉次
 深川の庵にて
 庵の夜もみしかく成ぬすこしつつ嵐雪
 さひしさの色は見えすかつこ鳥野水
 宵の間は笹にみたる、螢かな櫻元井輔

仲夏

(三之巻野廣)

葎室(りつしつ)むぐらの宿といふに同じ。

梅(さが)今の櫻(つが)也。(標註)

刈草の馬屋に光る螢かな一髪
 窓くらき障子をのほるほたる哉不交
 闇きよりくらき人呼螢かな風笛
 道細く追はれぬ澤の螢哉青江
 雨の夜は下ばかり行螢かな含咕
 草刈の袖より出る螢かなト枝
 水汲て濡たる袖の螢かな鷗歩
 はしめて、葎室をさふらはれける頃、
 こころかき覗く菖蒲の軒端哉秋芳
 蚊のむれて梅がの一木の曇りけり小春
 蚊遣火に寢所せまく成にけり杏雨
 雨の暮傘のぐるりに啼蚊哉二水

(三之巻野廣)

畫麻を季題に扱ふは近
世の事にて、蕉門にて
は無季也、この題も
百合也。

晉風曰、貞室の此句古
來不可解なす。試み
に私説を述べんに、
らし如く水に投ずる
也。すさくはくはそ
く也。繩を鵜匠の巧み
もし、その光景のみに
非は、さう見ゆるに、
ざるべし。難解にも

蚊の瘦て鎧のうへにこまりけり 一
藻の花をかつける 蚕の鬘カッラかな 胡
汐引て藻の花しほむ暑さかな 兒
足のへて姫百合折らす 晝寢哉 此
竹の子に行燈さけて廻りけり 長
筍タケノコの時よりしるし 弓の竹 去
聞をればたたたくてもなき 水鶏哉 野
五月雨に柳きはまる 汀かな 大津
此頃は小粒になりぬ 五月雨 尚
五月雨は傘に音なきを 雨間哉 龜
岐阜にて 貞
おもしろうさらしさはくる 鵜繩哉 室
七〇

樽(あふち)

火桶に撫子の花を畫く
は、後水尾院、又、東福
門院の好みといはる。

おなし所にて
おもしろうてやかてかなしき 鵜舟哉 芭 蕉
おなしく
鵜のつらに 簞こほれて 憐アハレ也 荷 今
聲あらは 鮎も啼らん 鵜飼舟 越 人
先舟の親もかまはぬ 鵜舟かな 大津 兒
曲江に 簞の見えぬ 鵜舟哉 梅 紺
鴨の巢の見えたりあるは かくれたり 路 通
松笠の緑を見たる 夏野かな 卜 枝
虹の根をかくす 野中の 樽かな 鈍 可
蘭ランの花や泥によこる、宵の雨 同 人
撫子や 蒔繪書人をうらむらん 越 人
七一

無名抄に「火おこさぬ
夏のすびつ心地して
人もすさめすさまじ
の身や」千鳥掛、蝶羽
夕顔や」初秋中の一
選に「遊びて」前書あ
り、諸集秋季に扱ひた
い。

冷しや灯のこる夏の朝藤蘿
夏の夜や焚火に簾見ゆる里旦菓

庵の留主に

すびつさへすごきに夏の炭俵其角
夕顔や秋はいろいろの瓢かな芭蕉
夕顔のしほむは人のしらぬ也野水
夕顔は蚊の啼ほさのくらさ哉借雪
山路来て夕顔見たる野中哉津島柳
名はへちま夕顔に似て哀也長虹

暮夏

楠も動くやう也蟬の聲昌碧

覆(えのき)に「え退き」
を言ひ掛けたり。
白雨(ゆうたち)夕立と
同義也。

おもはず 思ひ掛けぬ
人に也。

雲の峯腰かけ所たくむなり野水
夕立に干傘ぬる、垣穂かな傘下
涼しさに榎もやらね木陰かな立旨法印
涼しさよ白雨なから入日影去來
簾して涼しや宿のはひり口荷分
はき庭の砂あつからぬ曇哉同
おもはずの人に逢けり夕涼み鳴如海風
飛石の石龍や草の下涼み津俊似
涼しさや樓の下ゆく水の音同
桃灯のまこやらゆかし涼み舟ト枝
涼しさをわすれてもさる川邊哉未學
吹ちりて水の上ゆく蓮かな岐秀正

さかやき(月代)ひた
ひを深く剃り上げた
也。

結ふ(むすぶ)手に揃ひ
てのむ也。

虫干や 此句加賀の北
枝の句なりと誤傳され
たり。
釣鐘草(つりがねさう)
六月紫花を開く、其の
形状釣鐘の如し。

蓮見む日にさかやきはわる、さも
笠を着てみなく蓮に暮にけり
河骨に水のわれ行流れ哉
はらくみ清水に松の古葉かな
すみきりて汐干の沖の清水哉
連あまたまたせて結ふ清水哉
引立て馬にのまする清水かな
かたひらは淺黄着て行清水哉
直垂をぬかすに結ふ清水かな
虫干や幕をふるへはさくら花
麻の露皆こほれけり馬の路
釣鐘草後に付たる名なるへし
越

七四
松坂
晨

風
梵
水
虹
似
瀾
月
白
髮
枝
晨
人

(三之卷野曠)

綿の花たまく蘭に似たるかな
素堂

(三之卷野曠)

曠野集卷之四

初秋

ちからなや麻刈あごの秋の風越人
梧の葉やひきつかふらん秋の風圓解

雲居(うんこ)松島瑞巖寺の住職、名は希膺、萬治二年寂。

松島雲居の寺にて

一葉散音かしましきはかり也仙化

かたらひのち、むや秋の夕けしき津方生

男くさき羽織を星の手向かな杏雨

朝顔は酒盛しらぬさかり哉芭蕉

隣や垣ほのままのじたらくさ文鱗

朝顔の白きは露も見えぬ也荷今

(四之巻野曠)

笈日記に「人々郊外に送り出て三盃を傾侍るに」と前書あり。

牽牛子、毒あり、此葉に虫生ぜず。(標註)

子を守るものに、いひし詞の句になりて、

朝顔をその子にやるなくらふもの荷今

隣なる朝顔竹にうつしけり鷗歩

あさがほやひくみの水に残る月胡及

葉より葉にもいふやうや露の音鼠彈

秋風やしら木の弓に弦はらん去來

涼しさは座敷より釣鱸かな昌長

畦道に乗物すゑる稻葉かな鷺汀

松虫は通る跡より啼にけり一髮

きりきりす燈臺消て啼にけり素秋

あの雲は稻妻をまつたより哉芭蕉

稻妻やきのふは東けふは西其角

(四之巻野曠)

畦道(あぜみち)畦は和名抄に田界と註す。

笈日記に「こけて露けし」

宗祇の發句に「名もしらぬ小艸花さく川邊哉」

東日記、言水撰、延寶九年刊に「かれ枝に鳥のさまりたるや秋の暮」

白氏文集に曰「林間燈酒」

ふまれてもなほうつくしや萩の花 舟 泉
 ひよろひよろこ猶露けしや女郎花 芭 蕉
 棚作るはしめさひしき葡萄哉 作者不知
 草ばうばうからぬも荷ふ花野かな 伏見 口
 もえきれて紙燭をなくる薄かな 荷 兮
 行人や堀にはまらんむら薄 胡 及
 宗祇法師のここ葉によりて
 名もしらぬ小草花咲野菊かな 素 堂
 さしくのふる根に高き薄かな 俊 似
 仲秋
 かれ朶に鳥のさまりけり秋の暮 芭 蕉

つくつくミ繪を見る秋の扇かな 加賀 春
 谷川や茶袋そ、く秋のくれ 津島 益 音
 石切の音も聞けり秋の暮 傘 下
 斧の音や蝙蝠出る秋のくれ ト 枝
 鹿の音に人の顔見る夕かな 一 一 髮
 田ミ畑を獨にたのむ案山子かな 伊 豫 泉
 山賤の鹿驚作りて笑ひけり 重 五 泉
 紅葉にはたかをしへける酒の間 其 角 五 泉
 しらぬ人ミ物いひて見る紅葉哉 東 順 角 五 泉
 藪の中に紅葉みしかき立枝哉 林 斧 順 角 五 泉
 さこさなく地をはふ蔦の哀也 越 水 斧 順 角 五 泉
 わか宿はさこやら秋の草葉哉 宗 和 水 斧 順 角 五 泉

素堂(そたう)下谷池の端に寓し、後高飾に居を移し、池に蓮を植えて、蓮池翁と稱したり。

あせき(堰埭)

素牛(そきう)後に惟然と改む、美濃關はその故郷也。關孫六、志津三郎、共に刀工也。

甲子吟行に「我にきかせよや」とあり。

わか草庵にたつねられし頃

恥もせず我なり秋まおごりけり 加賀 枝

素堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか 越 人

一本の蘆の穂瘦しるせき哉 防 川

松の木に吹あてられな秋の蝶 舟 泉

はつみして寝られぬ蚊屋の別れ哉 胡 及

心にもかからぬ市のきぬたかな 曉 颯

關の素牛にあひて

さそ砧孫六屋しき志津屋敷 其 角

よし野にて

きぬたうちて我にきかせよ坊かつま 芭 蒸

いそかしや野分の空の夜這星 加賀 笑

暮秋

なにミなく植しが菊の白き哉 巴 丈

しら菊のちらぬそ少し口をしき 昌 碧

山路の菊野菊も又ちかひけり 越 人

一色や作らぬ菊の花さかり 曉 颯

荷兮か室に旅寝する夜、草臥なほせきて、箔つけ

たる土器出されければ、

かはらけの手きは見せはや菊の花 其 角

菊の露 シホル 凋る人 や 鬢 ヒシ 帽子 ハツ 子 シ 同 二 水

けふになりて菊作らうミおもひけり 二 水

鬢帽子(びんぼうし)鉢巻なり、五元集には「朝顔にしほれし人や」に作る。(標註)

かなぐりて蔦さへ霜の汐木かな 伊豫 八二
 淋しさは櫃カの實落る寢覺哉 濃州
 残る葉ものこらすちれや梅もさき加
 蘆の穂やまねく哀よりちるあはれ路 通
 夕 閣

(四之巻野曠)

曠野集卷之五

初冬

あめつちのはなしきたゆる時雨かな 湖 春
 京なる人に申遣しける
 一夜来て三井寺うたへ初しくれ 尙 白
 はつしくれ何おもひ出すこの夕 湍 水
 萬句興行に
 見しり逢ふ人のやまりの時雨哉 荷 兮
 人を待うくる日に
 今朝は猶空はかり見る時雨哉 落 梧
 釣鐘の下降のこすしくれかな 炊 王

(五之巻野曠)

諸曲三井寺に「來り候へかし語らばやと思ひ候し」

萬句興行(まんくこうぎよう)は一人にて一萬句獨吟する事なれど、後には連衆を集めて一同にて吟せる數一萬に充れは、これを以て萬句興行なりとせしが如し。

世に「風の荷兮」と稱するは、この發句に對する賞讃なり。

圍炬爐(あろり)

石路(つは)

渡し守はかり 簀着る時雨哉 傘下
 凧に二日の月のふきちるか 荷兮
 一葉ツ、柿の葉皆に成にけり 一髪
 木の葉たく跡は淋しき圍爐裏哉 同
 枇杷の花人のわするる木陰かな 同
 茶の花はものついでに見たる哉 李晨
 梨の花しくれにぬれて猶淋し 野水
 簀虫のいつから見るや 歸花 昌碧
 麥蒔て奇麗に成し庵かな 同 井
 のさけしや 麥まく頃の衣かへ 一 梧
 縫ものをたゝみてあたる火燧哉 落 及
 石臼の破てをかしや 石路の花 胡

(五之卷野賦)

木賊(こくさ)

葱(ねぶか)古本の、葱(しのぶ)は書損也。

鷹の巾(たかのきん)紙にてつくり鷹の頭をかす物なり。(大鏡)

青くこも木賊は冬の見物哉 文鱗
 あたらしき釣瓶にかかる葱かな ト枝
 冬枯に風の休みもなき野かな 洞雪
 蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉 一髪
 鷹居て石けつまつく枯野哉 松芳
 凧に吹さられけり鷹の巾 杏雨
 鷹狩の路にひきたる蕪かな 蕉笠
 寒月
 爐を出て度々月そ面白き 野水
 あさ漬の大根あらふ月夜哉 俊似

(五之卷野賦)

仲冬

たはしる 冬の日の脇
の「笠にさはしる」の
「さはしる」と同義語也。

せんたん(梅檀)棟也。

汐木(しほき)鹽を焼く
薪也。

おろしおく鐘しつかなる霞かな
津勝島 吉
しら波まつれてたはしる霞かな
津重島 治
搔よする馬糞にましる霞哉
林 斧
柴の戸をほこく間にやむ霞哉
杏 雨
いたたける柴をおろせば霞哉
宗 之
霜の朝せんだんの實のこほれけり
杜 國
水棚の菜の葉に見たる氷かな
勝 吉
深き池水の時に覗きけり
俊 似
つきわりて松葉搔けり薄氷
除 風
打をりて何そにしたき氷柱哉
夜 舟
兼題 雪舟
峠より雪舟乗おろす汐木哉
鼠 彈

(五之卷野廣)

白炭の「白炭や焼かぬ
むかしの雪の枝」の作
によりて斯く呼はる
也。衛(ちざり)

ふさぐ(塞)

ぬつくりみ雪舟に乗たるにくさ哉
荷 兮
夜をこめて雪舟に乗たる娘入哉
長 虹
馬屋より雪舟引出す朝かな
一 井
雪舟引や休むも直に立て居る
龜 洞
つけかへておくる、雪舟のはや緒哉
含 咕
青海や羽白黒鴨赤かしら
白炭 忠 知
舟にたく火に聲たつる衛かな
龜 洞
朝鮮を見たもあるらん友千鳥
村 俊
井を掘る者は六月寒く、米つくをまこは冬裸なり。
汗出して谷に突こむ氷室哉
冬 松
海鼠腸の壺埋めたき氷室哉
利 重
炭竈の穴ふさくやら薄けふり
龜 洞

(五之卷野廣)

冬椿の苔の赤みつくを
火ともす云ふ(大鏡)

元祿元年、芭蕉、越人と
同行木曾に旅し、木曾
の秤浮世の人のみやけ
哉の句あれは、芭蕉
その實を江戸の土産に
せるにや。(標註)

膝節をつつめさ出る寒さ哉 塩 加一賀 車
火さほして幾日になりぬ冬椿 加一賀 笑
いつこけし庇起せは冬つはき 龜 洞
冬籠またよりそはん此はしら 芭 蕉

歳暮

餅つきや内にもをらす酒くらひ 李 下
吾書てよめぬものあり年の暮 尚 白
餅花の後はす、けてちりぬへし 野 水
はる近く楳つみかへる菜畑哉 龜 洞
煤拂ひ梅にさけたる瓢かな 一 髮
木曾の月見て來る人のみやけにきて、杼の實ひさ

杼(こぢ)

田作(たづくり)今のこ
まめ也

つおくらる。年の暮まてうしなはず、かさりにや
せんきて、

年の暮杼の實ひみつころく 荷 今
門松をうりて蛤一荷ひ 内 習
田作に鼠追ふ夜の寒さ哉 龜 洞

曠野集卷之六

雜

年中行事歌合の題詠也

年中行事内十二句

タテマツル
供屠蘇白散

いはけなや屠蘇なめ初る人次第 荷 兮

春日祭(かすがまつり)
二月上申日。

春日祭

年こみに鳥居の藤の苔かな 同

石清水(いはしみず)臨
時祭三月中旬日

石清水臨時祭

杳音もしつかにかさすさくら哉 同

灌佛(くわんぶつ)四月
八日。

灌佛

けふの日やついてに洗ふ佛達 同

葵付たる加茂の競馬
には騎手、葵をつくる
也。

端午

おも 瘦て葵付たる 髪薄し 荷 兮

施米

うち明てほごこす米そ虫臭き 同

キカウツシ
乞巧奠

若菜より七夕草そ覚えよき 同

駒迎(こまむかへ)八月
十五日。

駒迎

爪髪も旅の姿や駒むかへ 同

撰虫

草の葉や足のをれたるきりきりす 同

十日朔日更衣(ころも
かへ)の節會を行ふ。

十月更衣

玉しきの衣かへよごかへり花 同

五節(ごせち)元日、白馬、踏歌、端午、豊明也。

詩三孰れも「白氏文集」より採る。

はし(誓)

五節

舞姫に幾度指を折にけり荷兮
追オミ儼ヤラヒ

追れてや脇にはつるる鬼の面同
詩題十六句

今日不知誰計會カセシ春風春水一時來ユル。

氷るし添ソフ水ツまたなる春の風野水

白片落梅浮フ澗水ニ。

水鳥のはしに付たる梅白し同

春來無シテ伴閑遊少キ。

花賣に留主たのまるる隣かな同

花下ニ歸ル因ニ美景ニ。

綿脱(わたぬぎ)着衣の綿を脱する事にて夏季也。

寢入なはもの引きせよ花の下野水

留ルニ春春不ト住ト春歸人寂寞タリ。

行春も心得かほの野守かな同

微風吹テ袂衣ヲ不レ寒復不レ熱ヲ。

綿脱は松風聞に行ころか同

池晚蓮芳謝ス。

蓮の香も行キ水ズキしたる氣色哉同

暑月貧家何所ソ有レ客來唯贈北窓風ヲ。

涼めこて切ぬきにけり北の窓同

大抵四時心總苦テ就レ中斷レ腸ヲ是秋天ニ。

雪の旅それらてはなし秋の空同

夜來秋雨後。秋氣颯然新トシテナリ。

ひたるう 腹のひもじ
きを覺ゆる也。

こがらし(風)

禪閣(ぜんがう) 一條兼
良(ぜん) 文明十三年歿、職人
盡(じん) 歌合の撰あり。

かけるふ(陽炎)

きはう(玉簪草)

秋の雨晴て瓜よふ人もなし野水

遅鐘ツル初長夜チキ。耿耿星河欲曙天。

ひこしきりひたるうなりて夜そ長き 同

殘燈影閃レ牆。斜月光穿レ牖。

ひこり寝や泣たる顔にまきの月 同

萬物秋霜能壞レ色。

白菊や素顔て見むを秋の霜 同

十月江南天氣好。可憐冬景似ニ春華。

こがらしもしはし息つく小春哉 同

寂寞深村夜。殘雁雪中間。

鉢たたき出も來ぬ村や雪の雁 同

白頭夜禮佛名經。

佛名の禮に腰腹く白髮哉野水

禪閣の撰ひのこし給ひしも、さすがにをかしくて、

鋸鏞目立

かけるふの夕日にいたきつふりかな舟泉

付木突

五月闇水鶏てはなし人の家 同

釣瓶繩打

かへるさや酒のみによる秋の里 同

糊賣

朝露のきはう折けむつくもかみ 同

馬糞搔

こがらしの松の葉かきみつれ立て 同

李夫人

魂在^{ハル}ニ何^{トコ}許^{ニカ}。香煙引到^{ニレテ}。焚^ヲレ香處^ニ。

かけるふの抱つけはわがころもがな 越人

楊貴妃

雲髻^{ノビ}半偏^{ハミク}新睡覺^{カタリ}。花冠不^トレ整^{ソノ}下^ヘレ堂來^{ツル}。

はる風に帯ゆるみたる寝顔かな 同

上陽人

小頭鞋履^{スホキ}窄衣裳^ヲ。青黛點^チレ眉眉細長^{クシウトキ}。外人不^{ニハ}レ見應^{ミエサ}レ笑^ニ。

物すきやむかしの春の儘ならん 同

西施

宮中拾^ヲニ得^ヲ娥眉^ヲ。不^ルレ獻^ハニ吾君^ニ。是愛^{ルナリ}レ君^ヲ。

花なから植かへらるる牡丹かな 同

御佛供(おぶく)一向宗
にていふ佛餉也。

王昭君

玉貌風沙勝^ル畫圖^ヲ。

よの木にもまされぬ冬の柳哉 越人

一日留守をする事待りて

卯

ねやの蚊や御佛供たく火に出て行 釣雪

辰

杜若生ん繪書の來る日かな 同

巳

講釋の眠りにつかふ扇かな 同

午

水あひよ藍干上を踏すこも 同

蜀漆(くさき)桐に似たる葉を持ちて臭氣強し臭木臭桐といふ。

火ぶり松明の光りに魚を寄せて獲る、夜振り也。

莊子の語に依つて、作者越人別號を負山子と稱す。後人眉山子に誤る。

さゞえ(榮螺子)

未

蟬の音に武家の夕食過にけり釣雪

申

五月雨や鶏こまるはね作り同

所にありて生をたつ事是非なし。

山猯

鹿笛の上手を盡すあはれさよ樹水

野鳥

鳴突の行かけなかき日あしかな兒竹

里虫

枝なからむし賣に行蜀漆かな含咕

海魚

おもしろき鱸引けり盆の月含咕

川魚

秋の暮鵜川くの火ふりかな同

牛馬四足是謂天。落馬首穿牛鼻是謂人。

一方は梅さく桃の繼木かな越人

藏ニ舟於壑藏ニ山於澤。謂ニ之固ニ矣。然而夜半有レ

力者負レ之而走。

からなから師走の市にうるささえ越人

絶レ聖棄レ知大盜乃止。

七夕よものかす事もなきむかし同

鋭者天

散はてて跡なきものは花火哉同

鈍者壽ニブキモノハイノキナカレ

雞頭の雪になるまで紅アサギかな市山

藤房

藤房(ふぢふさ)建武元年、後醍醐帝を諫めて去り、行く處をしらず。

時鳥鳴やむ時をしりにけり一井

師直

師直(もろなほ)高氏にて足利家に仕へし奸賊也。

美しく人に見らるるいづかな長虹

一休

一休(いつきう)其の奇行世に知らる。

いろくのかたちをかしや月の雲湍水

法然

法然(ほうねん)淨土宗の教祖源空也。

なく聲のつくろひもなき鶉うかな鼠彈

山岩

奥山は霞にへるか岩の角湍水

古本「苔ざりし」は海苔(のり)ざりしの誤也。

海岩

海苔ざりしあきには土もなかりけり湍水

曠野集卷之七

名所

甲子吟行に「湖水眺望」
 あり。
 阿波手(あはて)尾張あ
 はての森。
 琵琶橋(びわはし)名古屋
 屋より津島へ行く道に
 あり、長さ六十間(大
 鏡)
 萬葉「藤白のみ坂をこ
 ゆる白妙の我衣手はぬ
 れにけるかも」さ作れ
 るは紀伊也。

八重霞奥まで見たる龍田かな 杜
 白魚の骨や式部か大江山 荷
 から崎の松は花よりおほろにて 芭
 菓一把かりて花みる阿波手哉 湍
 嵯峨迄は見事あゆみぬ花さかり 荷
 雪残る鬼嶽さふき彌生かな 含
 關こえてここも藤しろみさか哉 宗祇法師
 美濃國關さいふ所の山寺に、藤の咲たるを見て、吟し給

(七之卷野曠)

賣をし(うり惜し)一本
 「賣たし」に作るは非な
 り。(標註)

一もさ草、未得撰、「京
 にてむつましかりつる
 友の武藏の國にさし經
 て住けるが角田川見せ
 んささそひければまか
 りて」さ詞書あり。
 貝のおこ。山伏の吹く
 ほら貝也。

ふみや。

芳野出て布子賣をし更衣 杜
 麥うつや内外もなき志賀のささ 重
 五月雨にかくれぬものやせたの橋 芭
 湖の水まささりけり五月雨 去
 牛もなし鳥羽のあたりの五月雨 一
 角田川にて
 いさのほれ嵯峨の鮎くひに都鳥 貞
 みよしのはいかに秋たつ貝のおこ 破
 十六夜もまた更科の郡かな 芭
 夕月や杖に水なふる角田川 越
 九月十三夜
 人 蕉 笠 室 髮 來 蕉 五 國

(七之卷野曠)

不盡十三夜の月は本朝の景物なれば也。(標註)

萱律(かやつ)尾張海東郡。

をの(小野)山城。

笈の小文に「鳴海にぞまりて」さあり。

夜の日(よるのひ)夜を日につぐの意。

笈の小文に「臍峠。多武峯より龍門へ越す道也」

ひさつ脱て史邦撰、小文庫に「せなに負けり」さあり。

唐土に富士あらはけふの月も見よ素堂
 鳴突の馬やり過す鳥羽川かな胡及
 鳴突は萱津のあまのうまこ哉淵支
 むさし野やいく所にも見る時雨舟泉
 湖を屋根から見せん村しくれ尙白
 唐崎やこまり合せて初しくれ伊隨像友
 むさし野さおもへこ冬の日脚かな洗惡
 めつらしこ生海鼠を焼やをの奥津俊似
 冬されのひこり轆轤や小野のおく一島笑
 雪の不二藁屋一ツにかくれけり湍水水
 よし野山もたた大雪のゆふへ哉野水
 星崎の闇を見よこやなく千鳥芭蕉

(七之卷野曠)

旅

夜の日や不破の小家のすゝ拂如行
 雲雀より上にやすらふ峠かな芭蕉
 大和國草尾村にて
 花のかけ謠に似たる旅寝かな芭蕉
 櫻咲里を眠りて通りけり夕楓
 日の入や舟に見て行桃の花一髮
 のさけしや湊の晝の生さかな荷今
 ひさつ脱て後におひぬ衣かへ芭蕉
 ある人の饑別に
 時鳥なみたおさへて笑ひけり除風

(七之卷野曠)

貞享五年、芭蕉越人
名古屋より更科に向ふ
送別吟にて、七句とも
同時の作也。

寝入らぬに食たく宿そ明安き冬松
蚊をころすうちに夜明る旅寐哉昌碧
五月雨や柱芽を出す市の家松芳
夕立にこの大名かひさしほり傘下
芭蕉士を送る
稻妻にはしり付たる別れかな釣雪
鳴く、て袂にすかる秋の蟬一井
秋風に申かねたる別れかな野水
物いはじた、さへ秋のかなしさよ舟泉
霧はれよ姿を松に見えぬまで鼠弾
さらしなに行、人くむかひて
更級の月は二人に見られけり荷今

(七之巻野曠)

狩野桶(かのをけ)狩野
元信、貧かりし時桶に
畫きて、ひさけるをい
ふ。(大鏡)

澤庵の墓 品川東海寺
の後山にある。
甲子吟行「犬も時雨
るか」そあり。

越人旅立けるよしを聞て、京より申遣す。
月に行脇差つめよ馬のうへ野水
おくられつおくりつ果は木曾の秋芭蕉
蜘蛛の巢の是も散行秋の庵路通
狩野桶いふもの、其角のはなむけに、おくるこて、
狩野桶に鹿をなづけよ秋の山荷今
こまりく、稻すり唄も替りけり^京ちね
入月に今しはし行こまりかな^立寮
能きけは親船にうつきぬたかな^一井
品川にて人に別るるこて
澤庵の墓をわかれの秋の暮文鱗
草枕犬もしくれか夜の聲芭蕉

(七之巻野曠)

貞徳に「あゝたつたひ
さり立たることし哉」
の句あり。
西行上人の天龍川にて
船頭に「かしら」をた
かれし逸事による。

旅なれぬ刀うたてや村しくれ
津常島 秀
鳴海にて芭蕉子に逢て

いく落葉それ程袖もほころひす
荷 兮
夢に見し羽織は綿の入にけり
野 水

其角に別るる時
ああたつたひさり立たる冬の宿
荷 兮
天龍てたたかれたまへ雪の暮
越 人 兮
から尻の馬に見て行千鳥かな
傘 下 兮
里人のわたり候かはしの霜
宗 因 兮

越人吉田の驛にて
寒けれも二人旅寝そたのもしき
芭 蕉
旅寝して見しや浮世の煤はらひ
同 蕉

(七之巻野曠)

述懐

草庵を捨て出る時

きゆる時は氷も消てはしる也
路 通
子をひさり守て田を打たた煽かな
快 宣
餘所の田の蛙入ぬも浮世かな
落 梧

高野にて
散花にたぶさ恥けり奥の院
杜 國
櫻見て行あたりたる乞食哉
梅 舌

高野にて
父母のしきりに戀し雉子の聲
芭 蕉
あやめさす軒さへ餘所のついで哉
荷 兮

(七之巻野曠)

玉葉集に「山鳥のほろ
くさなく響きけは父
かごぞおもふ母かごぞ
思ふ」

たぶさ(響)

さうぶ(菖蒲)

貞享四年、三河國保美村なる杜國の適居にての吟也。

廿四孝に「曾參醫指痛心」

つぶね(奴僕)

さより(鱧)今のさんま也。

たらちめ 親の枕詞也 暖甫(たんぼ)温甞也。

一一〇

さうぶ入湯をもらひけり一盤たね荷か兮
 一本のなすひも餘る住ひかな杏雨兮
 肩衣は緞モ子シにてゆるせ老の夏杉風兮
 似合しや白髪にかつく麻マ木キ賞カ龜洞風兮
 九月十日素堂の亭にて
 かくれ家やよめ菜の中に残る菊嵐雪
 かり家をむさほる菊の垣穂哉曉鬪雪
 人のいほりをたつねて
 されはこそあれたき儘の霜の宿芭蕉
 舊里の人にいひつかはず。
 こからしの落葉にやぶる小ゆびかな杜國
 鎌倉建長寺にまうてて

(七之卷野曠)

落葉かく身はつぶねもならばやな越人

ある人のもさより見よやきて、落葉を一籠おくられて

哀なる落葉に焼や鳥さより荷兮
 古郷の事、思ひ出る曉に
 たらちめの暖甫や冷ん鐘の聲鼠彈
 櫓の火に親子足さす佗寝かな去來
 目や遠う耳や近よるさしの暮西武
 古郷や臍の緒になくさしの暮芭蕉
 さまゝの過しを思ふさしの暮除風
 老を待すして、鬢先におころふ。
 行年や親に白髪をかくしけり越人

(七之卷野曠)

一一一

戀

春の野にこころある人の素顔哉 伊一勢有妻
 きぬくや余の事よりもほごきす 除風
 蚊屋出て寐顔また見る別れかな 長虹
 虫干の眼に立まくらふたつかな 文瀾
 むし干に小袖着て見る女かな 冬文
 ささけめし妹か垣根は荒にけり 心棘
 六宮粉黛無顔色
 宵闇の稻妻消すや月の顔 長虹
 一めぐり人待かぬるをさりかな 尙白
 さひしき折に

(七之巻野曠)

さ、けめし(大角豆飯)
 長恨歌に「回頭一笑百媚生、六宮粉黛無顔色」

越人「妻妾の羈につか
 はれ候まじし芭蕉に
 契約せし時ありと云
 ふ。(標註)

つまなし家主やくれし女郎花 荷兮
 しりなから薄に明る妻戸かな 小春
 妻の名のあらは消し給へ神送り 越人
 松の中しくる、旅のよめり哉 俊似
 物おもひ火燧を明ていかならん 舟泉
 うた、寐に巨燧消たる別れかな 嵐養
 山畑に物おもははや 蕪引 松芳
 きぬくを霞見よこてもさりけり 冬松
 おそろしやきぬくのころ鉢たたき 昌碧

(七之巻野曠)

無常

末期に

守武辭世は「朝顔にけふは見ゆらん我世かな」にして、此句は觀相に過ぎず、其角既に雜談集に辨ぜる如し。

散る花を南無阿彌陀佛ミ夕かな守武

無常迅速ジンソク

咲つ散つ隙なきけしの畠哉傘下

末期に

南無や空た、有明のほこさきす堺元順

松坂の浮瓢さいふ人の、身まかりたるにいひやり

ける

橘のかをり顔見ぬはかり也荷今

いもうこの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな京去來

ある人、子うしなはれける時申遣す

あた花の小瓜ミ見ゆるちきり哉荷今

作者コ齋は江戸の人、元祿元年歿す。

一原野(いちはらの)山城市原野にて貴船の下也、小町が墓ありといふ。

世をはやく妻の身まかりける頃

水無月の桐の一葉ミ思ふへし野水

辭世

あはれなり燈籠一つに主コ齋

子におくれける頃

似た顔のあらは出て見ん一踊り落梧

一原野にて

置露や小町か骨の見事さよ釣雪

妻の追善に

をみなへししでの里人それたのむ自悦

季下か妻の身まかりしをいたみて

ねられすやかたへひえ行北おろし去來

コ齊身まかりし後

その人の 歟さへなし秋の暮 其角
母におくれける子の哀を

をさな子やひこり飯くふ秋の暮 尙白

笈日記に「少年を失へる人の心を思ひやりて」あり。

ある人の追善に

埋火もきゆや泪の煮るおこ 芭蕉

旅にて身まかれる人を

沫雪のこゝかぬうちに消にけり 鼠 彈

鳥邊野のかたや念佛の冬の月 加賀 春

(七之卷野曠)

曠野集卷之八

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけす涅槃像 芭蕉

負て來る母おろしけりねはん像 鼠 彈

西行上人五百歳忌に

はつきりこ有明残るさくらかな 荷 兮

おなし遠忌に

連翹やその望の日こしほれけり 胡 及

うで首に蜂の巢かくる仁王哉 松 芳

木履はく僧もありけり雨の花 杜 國

(八之卷野曠)

西行(さいきやう)建久元年二月十六日示寂、五百年忌は元禄二年也

五元集に「日輪寺の僧
と連歌のかたはらに對
興して」とあり。
成辰(ぼしん)貞享五年
也。

法華經序品に「天雨曼
陀羅華」

龍女成佛のこゝ法華經
提婆達多品に出づ。

つりかねを扇てたたく花の寺冬
花に酒僧も陀ん壇肴其角

貞享成辰の歳彌生一日、東照宮の別當僧正の御房

に、慈惠大師遷座執事法華八講の侍るよし、尊き

事なれば聽聞にまかりて、序品の心を、

散る花の間はむかし咄しかな越人

女房の聽聞所覺て、御簾たれ奥くらき所あり。

龍女成佛の所に至りて、しのひあへす、鼻かむ聲

のしければ

ほろくこ落るなみたやへひの玉越人

觀音の尾上のさくら咲にけり俊似

古寺やつるさぬ鐘の葦草一井

(八之卷野廣)

江湖(きやうこ)禪の洞家
一夏の修行也。(標註)

笈の小文に「灌佛の日
は奈良にて愛かしく詣
侍るに鹿の子を産を見
て此日におゐておかし
ければ」とあり。

八島にて

海士の家聖呼こむ彌生かな伊千閣

咲にけりふへんな寺の紅牡丹一井

夏山や木蔭くの江湖部屋蕪葉

奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな芭蕉

灌佛の其頃清し白かさね尙白

高野にて

腰の扇禮儀はかりの御山かな一雪

齋に來て庵一日の清水哉加賀笑

十如是

おもふ事ながれて通る清水かな荷令

(八之卷野廣)

即身成佛

夏かけの晝寝はほんの佛かな愚
 ほころひや僧の縫せる夏ころも鼠
 おそろくや門もてありく施餓鬼柳 荷
 折かけの火をさるむしのかなしさよ 探
 石籠に施餓鬼の棚のくづれ哉 文
 魂祭り舟より酒を手向けり 龜
 魂まつり道ふみあくる野菊かな 卜
 攝待のはしら見立ん松のかけ 釣
 平等施一切
 攝待にたた行人をささめけり 俊
 稻妻に大佛をかむ野中哉 荷
 兮 似 雪 枝 洞 里 丸 兮 彈 盆

(八之卷野廣)

折かけ 盆會に墓へか
けて手向る小さき燈籠
也。(標註)

攝待(せつたい)

定家卿の十二月花鳥の
内に水鶏、雁、鶉あり。
それによるか。(大鏡)

安國論寺(あんこくろ
んじ)日蓮、四年間岩
窟に籠りて、安國論を
草せる所。

垣越に引導 覗くはせを哉 卜 枝
 ある人四時の景物なりきて、水雞と鶉とを不食、
 不圖其心を感じて、我も雁をくらはす。
 雁くはぬこころ佛にならばぬそ 荷 兮
 ある寺の興行に
 燕も御寺の鼓かへりうて 其 角
 進み出て坊主をかしや月の舟 一 井
 鉢の子に木綿をうくる法師哉 卜 枝
 人のもこにありて、立出んさしけるに、またしく
 れければ
 衣着て又はなしけり一時雨 鼠 彈
 鎌倉の安國論寺にて

(八之卷野廣)

五元集に「大津の驛」
ありて句は「馬もせは
しや」なり。

尊さの涙や直に氷るらん越人

古寺の雪

曉トキや伽藍カランくの雪見舞荷マユカ今

同

雪折やかゝる二王の片腕俊トキ似

作り置てこわされもせじ雪佛セツブツ一

朝寐する人のさはりや鉢たたきハチ文

千観か馬もかせはし年のくれチ其

薬王品七句

如コト寒者得カ火

まつ白に梅の咲たつ南かなマツ胡

如ハタカナル裸者得カ衣

雪の日や酒樽拾ふあまの家ユキ胡及

如カ商人得カ主

双六の相手呼こむつスウいりかな同

如カ子得カ母

竹立ておけはタケさりつくささけ哉同

如カ渡得カ船

月の頃隣ツキの榎伐にけり同

如カ病得カ醫

かわく時清水見付る山邊かなカ同

如カ暗得カ燈

秋の夜やおびゆる時に起さるるアキ同

ついで(微雨)

(八之巻野曠)

(八之巻野曠)

神祇

二月廿五日奉納に

古宮や雪汁かかる獅子頭釣雪
きさらきや廿四日の月の梅
しんくさ梅散りかかる庭火哉
鶯も水あひて来よ神の梅
上下のさはらぬやうに神の梅
灯のかすか也けり梅の中
何さやらをかめは寒し梅の花
覺えなくあたまそさかる神の梅
月額もしみるほこ也梅の露
雨桐

(八之巻野曠)

庭火(にはび)神苑にて
明りをさるために焚く
かゞり火也。

御祓(みそぎ)身の罪け
がれを祓ひきよむる神
事也。

えびす(夷)

門あかて梅の瑞籬をかみけり重
繪馬見る人の後のさくら哉立
花に來て齒朶かざり見る社哉
宮の後川渡り見るさくらかな
御手洗の木の葉の中の蛙かな
ほごさきす神樂の中を通りけり
宮寺の灯をわくる火串かな
破扇一度になかす御祓かな
川原迄瘡まきれに御祓かな
こからしや里の子覗く神輿部屋
此月のえびすはここにいます哉
冬されや禰宜の提たる油筒落
梧

(八之巻野曠)

高砂の謠に「久しき代々の神かくら夜のつゝみ」あり。

鈴鹿川(すゝかは)伊勢八瀬川をいふ。

若宮奉納

聞しらぬ哥も妙なり神々樂利重
跡の方ミ寝直す夜の神樂かな野水
鈴鹿川夜明の旅の神樂哉昌碧
かつらきの神にはふさき庭火哉村俊
橋杭や御祓かかる煤はらひト枝

祝

肩付はいくよになりぬ長閑也冬文
荷兮か四十の春に
いく春も竹その儘に見ゆるかな重五
君か代やみかく事なき玉椿越人

(八之巻野曠)

古本青苔とあるは書損也。

刷毛序集、露川撰、に「權七にしめす」文あり。

青海苔は何ほこもこれ沖の石傘下
生身魂疊の上に杖つかん龜洞
千代の秋にほひにしるしこさし米同
しはしかくれ居ける人に申つかはす
先祝へ梅をこころの冬こもり芭蕉

(八之巻野曠)

東四明(ひがしめい) 誰か市中にありて朝のけし
 山を四明(しやうめい) 誰か市中にありて朝のけし
 四明は江戸上野東叡山
 喜六(きろく) 佐川田
 昌俊(しやうしゆん) 永井家
 氏(うぢ) 昌俊(しやうしゆん) 永井家
 の臣也、その作「芳野山
 花咲頃の朝なく心に
 かゝるみねのしら雲」

小學致知類に虎の事見
 ゆ。(大鏡)

杜甫秋興の詩に夔府孤
 城落日斜每依北斗
 望京華聽猿實下三聲
 淚奉使虛隨八月槎

橋(かみ) 古本鐫
 は書損、字典に橋形如
 箕(かみ) (標註)
 おこし(おこし) (和名抄
 に「蜜を以て米を和し
 煎て作る」)

鷹(たか) を獲るこご
 初めて取りたる鷹を打
 下しさいふ。(大鏡)

曠野集員外

誰か花を思はさらん、誰か市中にありて朝のけし
 きを見ん。我、東四明の麓に在て、花の心はこれを
 こころとす。よつて佐川田喜六の、よしの山朝な
 くさいへる歌を實に感ず。又

麥喰し雁(かり) おもへさわかれかな
 此句尾陽の野水子の作にて、芭蕉翁傳へしを、な
 ほさりに聞しに、さいつ頃、田野へ居を移して、
 實に此句を感ず。

むかしあまたありける人の中に、虎の物語せし
 に、虎に追れたる人ありて、獨、色を變したるよし

(外員野曠)

誠のおほふへからさる事左の如し。猿を聞て實に
 下る三聲の涙さいへるも、實の字、老杜のこころ
 なるをや。猶雁の句をしたひて、
 麥を忘れ花におほれぬ雁ならし
 この文人の事つかりて、ささけられしを三人聞き、いく
 度も吟して、

手(て) をさしかさす峰の陽炎野
 橋(かみ) の路もしころに春の來て荷
 もの静なるおこし米うり越
 門の石月待闇のやすらひに
 風の目利を初秋の雲
 武士の鷹うつ山もほさ近し
 人兮水人兮水

(外員野曠)

千句(せんく)大原千句
のこま、催主細川玄旨
法印。

利根(とね)坂東太郎
也。

しをりについて瀧の鳴る音
袋より経こり出す草のうへ
づぶさふられて過るむら雨
立かへり松明直きる道の端
千句いさなむ北山の寺
姥さくら一重櫻も咲残り
あて事もなき夕月夜かな
露の身は泥のやうなる物おもひ
秋をなほなく盗人の妻
明るやら西も東も鐘の聲
寒うなりたる利根の川舟
冬の日のてかくさしてかき曇り

水兮人兮水兮人兮水兮人兮水兮人兮

(外員野曠)

柏木(かしはき)源氏若
采の巻、枯木(くき)衛門の
こま、かくびやうさい
ふもの所せく起り、脚
病即ちかけ也。

豕子(いのこ)玄猪也。

歩鷄(かちう)一人づか
ひの鷄也。(標註)
不破の萬作(ふはのま
んさく)豊臣秀次の屋
從、高野山にて殉死す、
年十八。

豕子に行き羽織うち着て
ぶらくさきのふの市の塩いなた
狐つきさや人の見るらん
柏木の脚氣の頃のつくつくさ
ささやく事の皆聞えつる
月のかげより合にけり辻相撲
秋になるより里の酒桶
露しくれ歩鷄に出る暮かけて
うれしさをしのふ不破の萬作
かしこまる諫に涙こほすらし
火箸のはねて手のあつき也
かくすもの見せよさ人の立かゝり

水兮人兮水兮人兮水兮人兮水兮人兮

(外員野曠)

かへり(漑取)

一三三

水せきこめて池のかへり
花さかり都もいまた定らす
捨て春ふる奉加帳なり
墨そめは正月こごに忘れつつ
大根きさみて干にいそがし
兮 水 人 兮 水

しめ(標)水上のしるしの木也。

百足(むかで)

遠淺や浪にしめさす蜷ナマリこり
はるの舟間に酒のなき里
のさけしや早き泊に荷を解て
百足の懼オソる薬たきけり
夕月の雲の白さをうちなかめ
舟野昌荷兮 洞
泉 水 碧 兮 洞

(外員野曠)

宜禰が麻(ねぎがぬさ)

今昔物語に頼光の家人女車にて嵯峨に詣で、剽盗を召捕りし事見ゆ。(大鏡)法輪ほうりん嵯峨の法輪寺也。

夜寒の簑を裾に引きせ釣雪
荻の聲こごこしれぬ所そや筆
一駄過して是も古綿龜洞
道の邊に立くらしたる宜禰が麻荷兮
樂する頃トキもおもふ年榮ハルヒ昌碧兮
いくつこもなくてめつたに藏造り釣雪
湯殿まるりの木綿たつ也舟泉
涼しやこ蕙もて來る川の端野水
たらかされしやタスる月荷兮
秋風に女車の鬘男龜洞
袖そ露けき嵯峨の法輪釣雪
時くにもものさへくはぬ花の春昌碧

(外員野曠)

一三三

垢離(ごり)水垢離を取る也。

高田派(たかたは)一向宗の一派。

八重山吹ははたちなるへし野
 日の出やけふは何せん暖に舟
 心やすけに土もらふなり龜
 向まで突やる程の小舟にて荷
 垢離かく人の着(き)ものの番昌
 配所(ハクショ)にて干魚の加減おほえつつ
 哥唄うたる聲のほそく
 むく起に物いひつけてまた眠り
 門を過行茄子よひこむ野
 入こみて足輕町の藪深し荷
 おもひ合たりきれも高田派釣
 盃も忘るはかりの下戸の月昌
 碧雪洞兮水泉雪碧兮洞泉水

(外員野曠)

小湊(こみなと)日蓮出生の地にて誕生寺あり。

かづら(籬)樋のたが也。

鯰(さぢやう)泥鰌也。

かまきり(蟻螂)

やや初秋のやみ上りなる野
 燕も大かたかへる寮の窓舟
 水しほはゆき安房の小湊龜
 夏の日や見る間に泥の照付て荷
 桶のかづらを入しまひけり昌
 人なみに脇差さして花に行釣
 つい田作りに落る精進野
 美しき鯰うきけり春の水舟
 柳のうらのかまきりの卵(カビ)松
 夕霞染ものさりてかへらん冬
 文芳泉
 水雪碧兮洞泉雪碧兮洞泉水

(外員野曠)

さてもなき 秋草の咲
きはびこれるをいふ
俗の「さんでもなき」
の意也。

はし(端)

火鼠のころも 竹取物
語に出る右大臣あべの
みうしの逸話也。

けふたきやうに見ゆる月かけ 荷
秋草のこてもなき程咲みたれ
弓ひきたくる勝角力こて
けふも又もの拾はんこ立いつる
たま／＼砂の中の木のはし
火鼠の皮の衣をたつね来て
涙見せじさうち笑ひつつ
高みより踏はつしてそ落にける
酒の半に膳持てたつ
幾年を順禮もせず口をしき
よまて双紙の繪を先に見る
何事もうちしめりたる花の顔
兮 泉 芳 兮 文 芳 泉 文 兮 泉 芳 兮

(外員野曠)

狭衣に飛鳥井の君が、
加茂にて威儀師に奪は
れしを、取かへしたる
こそ見ゆ。

隆辰(りうたつ)小唄
の作者、隆達節をは
む、和泉堺の人。

垂井(たるい)美濃。

月の朧や飛鳥井の君
灯に手をおほひつつ春の風
數珠くりかけて脇息のうへ
隆辰も入齒に聲のしわかる
十日の菊のをしき事也
山里の秋めつらしき生鱒
長持買うてかへるや、寒
さふ／＼流れを渡る月の影
馬のこほれは馬のいななく
淋しさは垂井の宿の冬の雨
庭ふまへて蕎麥あふつみゆ
つく／＼錦着る身のうこましく
兮 泉 芳 兮 文 芳 泉 文 兮 泉 芳 兮

(外員野曠)

漢邊にては具に緒をつ
けて、下駄のかはりに
履けり。(標註)

曉ふかく提婆品よむ
けしの花さり直す間に散にけり
味増する音の隣さわかし
黄昏の門さまたけに薪分
次第くにあたたかになる
春の朝赤貝はきてありく兒
顔見に戻る花の旅立
きさらきや瀑を買に夜をこめて
そらおもしろき山口の家
今 文 芳 泉 文 兮 泉 芳 兮

(外員野曠)

時鳥またぬこころの折もあり
兮

かたぎは。片方の見誤
りなるべし。(婆心録)
からかひ(擲掄)

きくらげ(木茸)

土菌(つちこ)畑土に
糞汁をそき干付て
貯へ置く也。(婆心録)
突張(ついはり)杭など
を突張に用ゐ、帷道の
崩れを支る也。

雨の若葉にたてる戸の口野
引捨し車は琵琶のかたぎにて
あらさがなくも人のからかひ
月の秋旅のしたさに出るなり
一荷になひし露のきくらげ
初嵐はつせの寮の坊主共
菜畑ふむなみ呼びかけたり
土菌を夕くに搔よせて
印判おこす袖そ物うき
通路の突張こけて迹かへり
六位になりし戀の浮氣さ
代まるりた、やすくも請おひて
水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮

(外員野曠)

天仙蓼(また、ひ)芽
をつみ、ひたして食用
とす。
かけがね(懸金)

公事根言に信濃駒迎八
月十六日、甲斐同十七
日。

生身魂(いきみたま)七
月十五日、存命の父母
の壽を祝する也。

錢 一貫に 鯉 一ふし
月の朝鶯告にいそくらん
花咲けりこころまめ也
天仙蓼に冷食あさし春の暮
かけかねかけて看經の中
た、人となりて着物うちはおり
夕せはしき酒ついてやる
駒のやぎ昨日は信濃けふは甲斐
秋のあらしにむかし淨瑠理
めてたくもよばれにけらし生身魂
八日の月のすきこいるまで
山の端に松モミ縦モミのかさかなる
水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同

(外員野曠)

忍ぶごも ひそかに
曳をかさね居る也。

きつきたばこにくらくくする
暑き日や腹かけばかり引結び
太鼓たたき階子のほるか
ころくゝ寝たる木賃の草枕
氣立のよきき聲にほしかる
忍ぶごもしらぬ顔にて一二年
庇をつけて住居かはりぬ
三方の數むつかしき火にくふる
供奉の草鞋を谷へ掃こみ
段くや小塩大原嵯峨の花
人おひに行春の川岸
水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同 水 同

(外員野曠)

其角の句に「夏の夜や蚊を疵にして五百兩」

團(うち)は「執扇如團月」

まつくり(徳利)

つかへ(痞)

あはう(啞方)痴人也。

月さしのほるけしきは、晝の暑さもなくなるおも
しろさに、柄をさしたらはよき團扇、宗鑑法師
の句をすんじ出すに、夏の夜の疵いふ、なほ其
跡もやますつゝきぬ。

月に柄をさしたらはよき團哉
蚊のをるはかり夏の夜の疵 越
まつくりを誰置かへてころふらん 傘
おもひかけなき風吹のそら
真木柱つかへおさへてよりかゝり
使の者に返事またする
あれこれ猫の子をえるさまくりに
年たくるまであはう也けり
下 筆 同 人 同 下 人

(外員野曠)

手の筋(てのすぢ)手相
のこご。

まみ(眉)

繩うつ 釣瓶繩を縛ふ
こご也。

正月より六月までに生
れたるは花の賀、七月
より十二月までに生れ
たるは紅葉の賀を祝
ふ。(大鏡)

まこてやら手の筋見せて物思ひ
まみおもたけに泣はらす顔
大勢の人に法華をこなされて
月の夕に釣瓶繩うつ
喰柿も又くふ柿も皆蒞し
秋のけしきの畑見る客
我儘にいつか此世をそむくへき
寝なから書か文字のゆかむ戸
花の賀にこらへかねたる涙落つ
着ものの糊のこはき春かせ
打むれて浦の苦屋の汐干見よ
内へはひりて猶ほゆる犬
下 同 人 同 下 同 人 同 下 同 人

(外員野曠)

獨鈷鎌首(ごつこ、かまくらび、井蛙抄に左大將家歌合に、照は獨鈷をもち、寂連は鎌首をもち、相争ひたるより出づ。)

みのころ草(狗尾草)

人の請(ひさのうけ)身許引受け也。
直、大鏡は(あき)さいひ、婆心録は(つこ)ないり、訓じ、標註は(昔)ちさの誤字かと疑ふ。

小諸(こもろ)信濃。

百萬(ひやくまん)一子を寄ねて狂ひあるき、釋迦堂の念佛にて、めぐり合ふ諸曲百萬の故事也。

からひすや 枕草紙に「雁の聲は遠く聞えたるあはれなり」とある如く、淋しくからびを待つをいふ。婆心録は「かまびすや」とし、聒の字をあてたり。
藤袴(ふぢはかま)草の名。

莊子に「魏王貽我大瓠之種、我樹之成而實五石」

醉さめの水の飲みたき頃なれや
た、しつかなる雨の降出し
歌あはせ獨鈷鎌首まるるる
また獻立の皆ちかひけり
灯臺の油こぼして押かくし
白をおこせはきりくす飛
吹風にゐのころ草のふらく
半はこわす築山の秋
むつく、月見る顔の親に似て
人の請にはたつこもなし
にきはしく瓜や直やを荷ひ込
干せる疊のころふ町中
人下 人同 下同 人同 下同 人下

(外員野曠)

深川の夜

おろく、小諸の宿の晝時分
皆同音に申す念佛
百萬もくるひ所よ花の春
田樂きれて櫻淋しき
雁かねもしつかに聞はからひすや
酒しひならふこの頃の月芭
藤袴誰窮屈にめてつらん
理をはなれたる秋の夕暮越
瓢箪の大きさ五石はかり也同
人下 人下 人下 人下 人下 人下

(外員野曠)

長安(ちやうあん)支那の古都也。詩に「長安古來名利地空手無金行路難」

立蕃(けんぱ)諸蕃の事を掌る官名。こゝは立蕃を名のる郷土也。

すへりきぬ(こり来ぬ)膳部に手つかずそのまゝ下けたる也。
いそくさき(磯臭き)

風 に 吹 れ て 歸 る 市 人 芭

何 事 も 長 安 は 是 名 利 の 地 同

醫 の 多 き こ そ 目 くる ほ し け れ 越

い そ か し し 師 走 の 空 に 立 出 て

ひ そ り 世 話 や く 寺 の 跡 こ り

此 里 に 古 き 立 蕃 の 名 を つ た へ

足 駄 は か せ ぬ 雨 の あ け ほ の

き ぬ く や あ ま り か ほ そ く あ て や か に

風 ひ き た ま ふ 聲 の う つ く し

手 も つ か す 晝 の 御 膳 も す へ り き ぬ

も の い そ く さ き 舟 路 な り け り

月 さ 花 比 良 の 高 根 を 北 に し て

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

(外員野曠)

破戸(やぶれど)

十寸鏡(ますかみ)よく澄みたる鏡也。

神子(みこ)

芭蕉の發句「春の夜や初瀬にこもる堂の隅」

源氏夕顔の巻に「山の端のこゝろもしらで月の上はの空にてかけやたへなん」

雲 雀 さ へ つ る こ ろ の 肌 ぬ き

破 戸 の 釘 打 付 る 春 の 末

み せ は さ ひ し き 麥 の 挽 割

家 な く て 服 紗 に つ つ む 十 寸 鏡

物 お も ひ る る 神 子 の も の い ひ

人 去 て い ま た 御 坐 の 匂 ひ け る

初 瀬 に こ も る 堂 の 片 隅

時 鳥 鼠 の あ る 最 中 に

垣 穂 の さ け 露 は こ ほ れ て

あ や に く に 煩 ふ 妹 か 夕 な が め

あ の 雲 は 誰 か 涙 つ む そ

行 月 の う は の 空 に て 消 さ う に

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

(外員野曠)

談義(たんぎ)浄土宗の
説教也。

元祿元年(貞享五改元)
秋芭蕉、越人を伴ひ更
科紀行を終へて、江戸
に來る。

三夜さの月は待宵、名
月、既望(いざよひ)也

砧も遠く鞍にいねぶり
秋の田をからせぬ公事の長ひきて
さいく／＼なから文字間に來る
いかめしく瓦庇ヒツレの木藥屋
馳走する子の瘦てかひなき
花の頃談義まるりもうらやまし
田にしを喰て腥ナメクラサきくち

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉

(外員野曠)

翁に伴はれて來る人のめつらしきに

落着ツクに荷ツク兮の文や天津雁
三夜さの月見雲なかりけり
越

人角

再版誰を唯に誤る(婆
心録)

まぶた(臉)

離魂の煩(かけのなや
み)漢醫にかけの病さ
いふ。今の離魂病也。
京室町の宗甫、二人の
子の放埒なるを勘當し
て、家財を二萬兩に替
へ貧窮人を救へり(大
鏡)

古詩に「酔後耳熱」

菊萩の庭に疊を引すりて
飲てわする、茶は水になる
誰か來て裾にかけたる夏衣
齒きしりにさへ曉のかね
恨たる涙まぶたにこまりて
靜御前に舞をすすむる
空蟬ウツセミの離魂カゲの煩わづのおそろしき
あこなかりける金二万兩
いさほしき子を他人も名付たり
やけぎ直して見しつらきかな
酒熱アツき耳につきたるさゝめここ
魚をもつらぬ月の江の舟

人角人角人角人角人

(外員野曠)

月令博物筌に六月十六日、十六歳の男女振袖にて、土器の大饅頭をこり、中に穴をあけて月を見る、袖留の式といふ。
西王母(さいわうぼ) 東方朔(とうほうさく) 平家物語に「西王母云し人も昔はありて今はなし、東方朔と聞しも名をのみ聞て目には見ず、衣の妻(きぬのつま)袂にて着物の裾也。」

宿(しゆく)

そめ色の富士は淺黄に秋の暮
花ささしたる草の一瓶
饅頭をうれしき袖につゝみける
うき世につけて死ぬ人は損
西王母東方朔も目には見す
よしや鸚鵡の舌のみしかき
あちきなや戸にはさまるゝ衣の妻
戀の親も逢ふ夜たのまん
やや思ひ寝もしねられす打臥て
米つく音は師走なりけり
夕鳥宿の長さに腹のたつ
いくつの笠を荷ふ強力

同 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人

(外員野曠)

穴いち 穴を地に穿ち
錢を抛つて勝負を争ふ
八朔(はつさく) 八月一日也、こゝは後の雛の事也。
念者(ねんじや) 男色也。

あさつき(胡葱)
呼賣(よびつき) 尾張の築出、鳥居崎より笠寺村の邊りまでを云ふ。(標註)

穴いちに塵うちはらひ草枕
ひゝなかさりて伊勢の八朔
満月に不斷櫻をなかめはや
念者法師は秋のあきかせ
夕まくれまたうらめしき紙衣夜着
弓すゝひたる突あけの窓
道はたに乞食の鎮守垣ゆひて
ものきゝわかぬ馬士の鬮さり
花の香にあさつき膾みこり也
むしろ敷へき喚續の春

人 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人

(外員野曠)

我(ワ)不(レ)醜(カ)なり(標註)

外面(ソ)も(家)のうし
ろの事也。

ふるき小唄に(は)なれ
月のわかれが(お)もはる
後(そ)へ(のち)添(後)妻
を(さ)れ(さ)す(め)らる(也)。

一五二

我もらじ新酒は人の醒やすき嵐
 秋うそ寒しいつも湯嫌越人雪
 月の宿書を引ちらす中に寐て
 外面薬の草わけに行
 はねあひて牧にましらぬ里の馬
 川越くれば城下の道
 瘡(イ)瘡(イ)顔の透(シ)ほる程齒の白き
 唱(シヤ)哥(カ)はしらす聲ほそりやる
 泪みるはなれくのうき雲に
 後そひよべさいふかはりなき
 今朝よりも油あけする玉たすき
 行灯はりてかへる浪人
 雪 同 越 同 雪 同 人 同 雪 同 人 雪

(外員野曠)

碓(きぬた)

よふこ鳥(喚子ざり)和
歌二鳥の一也。

一五三

着物を碓にうてこ一つ脱
 明日は髪そる宵の月影
 白露の群て泣居る女客
 つれなの醫者の後姿や
 ちる花に日は暮れこも長咄し
 よふこ鳥(は)何をいふらん
 初雪やこころのひたる桐の木に野水
 日のみしかきき冬の朝起落梧
 山川や鶺鴒の喰ものをさかすらん同
 賤(シ)を遠から見るへかりけり野水
 水 梧 水
 同 人 雪 同 人 同
 同 人 雪 同 人 同

(外員野曠)

無名抄に陸奥守爲仲、
任果て上洛の時、宮城
野の萩を掘り、長櫃に
入れ持ち登れる事見
ゆ。歩(ぶ)川越しの課役
也。

わかせこ(吾背子)情人
也。すがき(清掻)筭のす
すがきより二弦の手に
うつれり。しづかかき
の略。

こそぐり(櫛)

思ふさま押あふ月に草臥つ野
あらかここくし長櫃の萩落
川越の歩にさされ行秋の雨
ねぶこいたかる顔のきたなき
わかせこをわりなくかくす縁の下
すががき習ふ頃のうき戀
更る夜の湯はむつかしき水飲て
こそぐりおこす相住の僧
峰の松あぢなあたりを見出した
旅するうちのこゝろ奇麗さ
烹た玉子なまの玉子も一文に
下戸は皆いく月のおほろけ

水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水

(外員野曠)

くさび(轄)

大和物語に醍醐帝ある
曹子にて泣き居る女
を公忠に子細を問はせ
たるに髪をふり覆ふ
ていみじうなく、なご
てなくぞこいへさ、い
らへもせずさある故
事取也。(婆心録)

菴道(えんだう)行幸の
道筋に菴をしく也。

耳や齒やようても花の数ならず
具足めさせにけふの初午
いつやらも鶯聞ぬ此おくに
山伏住て人しかるなり
くわらくくさびぬけたる米車
桃灯過てあきくらきくれ
何事を泣けん髪を振おほひ
しかくものをはぬつれなき
はづかしさいやかる馬にかきのせて
かかる府中を飴ねふり行
雨止て雲のちきる、面白や
柳ちるかみ例の菴道

水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水

(外員野曠)

占(うらなひ)

くらかり峠は大和平群
郡にありて河内境也。
ねぶりころべ(睡り轉
べ)

軒なかく月こそさはれ五十間

寂しき秋を女夫居りけり

占を上手にめさるうらやまし

黍もてはやすいにしへの酒

朝毎の干魚備るみつ垣に

誰より花を先へ見てさる

春雨のくらかり峠こえすまし

ねふりころべさ雲雀鳴也

一五六

水

梧

水

同

梧

同

水

梧

一里の炭賣はいつ冬こもり一

かけひの先の瓶氷る朝鼠

井

彈

(外員野曠)

肩衣(かたきぬ)

塘(つゝみ)
即(ふな)和名抄に蟹、
鯽・鱒皆同じ、婆心録
に鯽(カニ)なりさいへ
さ不審。

さきくさや正木を引に誘ふらん 胡

肩衣はつれ酒に酔ふ人 長

夕月の入際はやき塘きは

たわらに鯽をつかみこむ秋

里深く踊教へに二三日

官司が妻にほれられてうき

問れても涙にもの言にくき

葛籠さきて切ほさく文

うさく寝起なからに湯をわかす

寒ゆく夜半の越の雪 鋤

何事か呼びあひては打わらひ

蛤さりは皆女中なり

一五七

及 虬 彈 井 虹 及 井 彈 及 虹 彈 井 及 井 彈 及 井 彈 及 井 彈

(外員野曠)

紀伊名草郡瀨中村、長保寺、紀州家の御魂屋あり。(大鏡) 矢鴨の羽にてはさし、巻薬を射る也。(標註)

浦風に脛吹まくる月涼し
見るもかしこき紀伊の御魂屋
若者のさし矢射てをる花の蔭
蒜くらふ香に遠さかりけり
春の暮ありきくも睡るらん
紙衣の綿の裾に落つく
はなしするうちもさいく手を洗ひ
坐敷程ある蚊屋を釣けり
木鉄に明るう成りし松の枝
秤にかかる人くの興
此年になりて灸の跡もなき
まくらもせずについ寐入る月

虹 井 及 虹 井 彈 虹 及 彈 井 及 虹

(外員野曠)

こき(扱)しごく也。
御有様(おありさま)行
状也。

唐丸(たうまる) 鴨
也。

つゝじ(躑躅)

暮過て障子のかけのうそ寒き
こきたるやうにしほむ萩の葉
御有様入道の宮のはかなけに
衣引かぶる人の足音
毒なり瓜一切も喰ぬ也
片風たちて過る白雨
板へぎて踏所なき庭の内
はねのぬけたる黒き唐丸
ぬくくみ日脚のしれぬ花曇
見わたすほこは皆つゝし也

及 虹 彈 井 及 虹 井 彈 虹 及

(外員野曠)

ひさご

珍碩(ちんせき)近江膳所の人漢田酒堂也。ひさごの撰者也。
莊子曰、夫子固拙於用大今子有五石之瓠何不用之慮以爲大樽而浮乎江湖。
惠子(けいし)莊子問答せる人也。

元稹の詩に「壺中天地乾坤外」

江南の珍碩、我にひさごをおくれり。是はこれ水漿をもち、酒をたしなむ器にもあらず。或は大樽に造りて、江湖をわたれ、さいへるふくへにも異なり。吾また後の惠子にして、用るこをしらす。つらく其ほりに睡り、あやまりて此うちに陥る。醒て見るに、日月陽秋きららかにして、雪のあけほの、闇の郭公もかけたる事なく、なほ吾知人にも見えきたりて、皆風雅の藻思をいへり。しらす、是はいつれの所にして、乾坤の外なるこを。出て其事を云て、毎日此うちをこり入。

(ごさひ)

元祿三六月

越智越人

花見

鞆(ひきはた)鞆の肌に似たる鞆ある、革造りの鞆袋也。
司召(つかさめし)八月十一日、在京の官人に爵祿を賜ふ。

入込(いりこみ)混浴也。
せい(身丈)

木のもごに汁も鱸も櫻かな 翁
西日のさかによき天氣なり 珍碩
旅人の虱かき行春暮て 曲水
はきも習はぬ太刀の鞆 翁
月待て假の内裏の司召 碩
粉白つくる柚かはやわさ 水
鞍置る三歳駒に秋の來て 翁
名はさまくに降替る雨 碩
入込に諏訪の涌湯の夕間暮 水
中にもせいの高き山伏 翁
いふ事を唯一方へ落しけり 碩

(ごさひ)

白子(しらこ)若松(わかまつ)共に伊勢の地名也。
一身田(いしんでん)高田派の本山、寛政年中下野高田より伊勢に移して此處を本山とす。(大鏡)

手束弓(たづかゆみ)萬葉に「朝もよし紀の關守か手束弓」とよめり。

細き筋より戀つものりつ、
物おもふ身に物喰へさせつかれて
月見る顔の袖おもき露
秋風の船をこはかる波の音
雁行かたや白子若松
千部讀花の盛りの一身田
順禮死ぬる道のかけるふ
何よりも蝶の現、そ哀なる
文書ほこの力さへなき
羅^{ウスモ}に日をいさはる、御かたち
熊野見たき泣給ひけり
手束弓紀の關守か頑^{カタチ}に
水 頤 翁 水 頤 翁 水 頤 翁 水 頤 翁 水

(ごさひ)

はげ(元け)

持佛(ぢぶつ)肌身に添へて祈る佛也。

續草庵集に兼好の許より「よもすしねぎめのかりほたまくらもまぞでも秋にへたてなきかぜ」よねたまへせに「もほし」香冠によみ來れるに「頼阿」よるもしねたかくわがせこはては「こすなほざりにたに」は「しほ」ひませ「よね」は「な」し「せ」よ「ね」歌せし佛也。(大鏡)

酒てはけたるあたま成らん
双六の目を覗くまで暮か、り
假の持佛にむかふ念佛
中く土間に居れば蚤もなし
我名は里のなぶりもの也
憎れていらぬ踊の肝を煎
月夜く明渡る月
花薄あまりまねけはうら枯て
唯四方なる草庵の露
一貫の錢むづかし返しけり
醫者の薬は飲ぬ分別
花咲は芳野あたりを欠廻り
水 頤 翁 水 頤 翁 水 頤 翁 水 頤 翁 水

(ごさひ)

蛇ヘビにささるる春の山中 碩

「むつかしや 三冊子に
「粉らはし」
夢は覺ぬる 同「めを
さましぬる」

かます(蒲筍)吠也。

いろくの名もむつかしや春の草 珍
うたれて蝶の夢は覺ぬる 翁
蝙蝠の長閑につらをさし出て 路
駕のさほらぬ峠越たり 通
紫蘇の實をかますに入る夕間暮 碩
親子ならひて月にものくふ 同
秋の色宮も覗かせ給ひけり 同
こそくられてはわらふ佛 通
うつり香の羽織を首に引まきて 碩

(ごさひ)

小六(ころく)小唄也
具おほひの序に「小唄
ついたる竹の杖ふし
ふし多き小歌にすが
り」さ見ゆ。
みづがき(瑞籬)

庄野(しやうの)伊勢亀
山より二里。

和日(にはひ)婆心録に
「のさか」と訓めり。

そろはん(十呂盤)

小六うたひし市のかへるさ 同
鮫サマのちひさく見ゆる川の端 通
念佛申てをがむみづがき 同
こしらへし薬もうれす年の暮 碩
庄野の里の犬におきされ 同
旅姿稚き人のおんなつれて 通
花はあかいよ月はおほる夜 同
汐のさす縁の下まで和日也 碩
生鯛あかる浦の春かな 同
此村の廣きに醫者のなかりけり 今
そろばんおけはものしりさいふ 今
かはらさる世を退屈もせずに通 人

(ごさひ)

蕎麥に過鈍の附一奇也
(標註)

すも、(李)

楞嚴經に見えたり(標註)

ひしほ(醬)

枕草紙に「あせの香す
こしかへたるきぬの
うすきを引かづきて」

また泣出す酒の醒きは
 なかめやる秋の夕そたたた廣き
 蕎麥真白に山の洞中
 うさんうつ里のはつれの月の影
 すも、持子の皆裸むし
 珍らしや鬪烹る也こ立こまり
 文珠の智慧も槃特が愚痴
 なれ加減又こは出来じひしほ味噌
 何こもせぬに落る釣棚
 しのふ夜のをかしうなりて笑出す
 逢より顔を見ぬ別れして
 汗の香をかかえて衣をこり残し

人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮

(ごさひ)

ますほ(眞蘇枋)奥細道
に「ますほの小貝ひろ
はんさいろの濱に舟を
走す」越前也。

しきりに雨はうちあけて降
 花さかり又百人の膳立に
 春は旅こもおもはさる旅

同 兮 同

城下

鐵砲の遠音にくもる卯月哉野
 砂の小麥の瘦てはらく里
 西風にますほの小貝拾はせて泥
 なまぬる一つ鬮ひかねたり乙
 暮いさかひ二人しらける有明に怒
 秋の夜番の物申の聲珍

徑 東 土 州 誰 碩

(ごさひ)

原本、「おけはれて見ゆれども、おそはれの書損か、異本に又おもはれて作る覺にや(標註)川原咄し(かはらはなし)一京、宮川丁か木屋町の貸座敷ならん。(婆心録)

丁百(ちやうびやく)錢百文を百文に通用すること。

女郎花心細氣におそはれて筆
 目の中おもく見遣かちなる野
 けふも又川原咄しをよく覺え
 顔のをかしき生れつき也
 馬に召神主殿をうらやみて
 一里こそぞり山の下刈
 見知られて岩屋に足も留られす
 それ世は泪雨こ時雨こ
 雪舟に乗る越の遊女の寒さうに
 壹歩につなく丁百の錢
 月花に庄屋を寄て高ふらせ
 煮染の塩のからき早蕨

東 徑 州 誰 土 東 土 誰 州 碩 誰

(ごさひ)

はくち(博奕)

大岡寺(たいおんじ)關さ
 龜山(かめやま)の間にあり、繩
 手の長さ十八丁。
 こはる痛む也、虫の
 起りたる也。

菜食(なめし)菜又は大
 根を刻みて、飯にまぜ
 て炊く。

來る春につけても都忘れす
 半氣違ひの坊主泣出す
 呑に行居酒の荒の一課
 古きはくちの残るかまくら
 時くは百姓迄も烏帽子にて
 配所を見舞ふ供御の蛤
 黄昏は船幽靈の泣やらん
 連も力も皆座頭也
 から風の大岡寺繩手吹透し
 蟲のこはるに用叶へたき
 糊剛き夜着にちひさき御座敷て
 夕邊の月に菜食嗅出す

東 碩 州 徑 誰 土 碩 東 土 誰 州 碩 誰

(ごさひ)

咳氣聲(がいきごゑ)風邪聲也。

雜(ざふ)四季の題の入りざる句をいふ。

からうす(確)

かます(こ)梭魚子(いかなご)といふ魚の煮から也。卷樽(まきたる)輪を重ねて巻ける樽。

看經の嗽にまきる、咳氣聲
四十は老のうつくしき際
髪くせに枕の跡を寐直して
醉を細目にあけてふかる、
杉村の花は若葉に雨氣つき
田の片隅に苗のさりさし
土誰徑州碩東

(ごさひ)

雜

龜の甲烹らるる時は鳴もせず乙
唯牛糞に風のふく音珍
百姓の木綿仕まへは冬の來て里
東碩州

(ごさひ)

小唄そろへるからうすの繩探
獨寝て奥の間ひろき旅の月昌
蟪蛄落ちてきゆる行燈正秀房志
秋萩の御前に近き坊主衆及
風呂の加減のしつか也けり野
鶯の寒き聲にて鳴出し二
雪のやうなるかますこの塵乙
初花に雛の卷樽居ならへ珍
心の底に戀そありける里
御簾の香に吹そこなひし笛の役探
寐ごみに起て聞は難啼
錢入の巾着下て月に行
秀房志東碩州嘯徑肩秀房志